



## 第一幕

### ◇登場人物

デルビン（刑務所長）

ポチョムキン（移住囚）

ナターシャ（ポチョムキンの娘・自由民）

エゴール（移住囚・デルビンの召使）

ウオツカ／タルグーク（ニヴフ※の娘）

ソフィア（懲役囚）

ピシチコフ（懲役囚）

塩川正十郎（日本人・商人）

チエーホフ

※劇中ではニヴフを「ギリヤーク」と表記しています。

### ◇一幕のあらすじ

樺太千島交換条約によってサハリンを得た帝政ロシアは、島を流刑地とし、囚人による開発を進めていました。そして1890年。夏。移住囚ポチョムキンの家では、娘ナターシャと刑務所長デルビンの結婚披露宴がひらかれようとしていました。披露宴にはサハリンを訪れていた作家チエーホフの他、懲役囚のピシチコフとソフィアも招かれ、彼らの振る舞いによって宴は散々な結果に。さらにナターシャに思いを寄せる日本人塩川正十郎も登場し、デルビンに決闘を申し込めます。

### シーン① 披露宴の準備

ここはポチョムキンの家の居間。

大きなテーブルと椅子がいくつか置かれている。

上手は台所と家族の寝室につながる。下手奥は玄関。また下手の前側は庭になっていて、居

間とは別の空間になっている。

季節は7月。サハリンの短い夏である。

庭にトリカブトの青い花が揺れる。

時刻は正午過ぎ。今日はポチヨムキンの一人娘ナターシャの結婚披露宴。

居間には父親のポチヨムキンがウォッカを飲んでいる。その隣に塩川。

ポチヨムキン 欲望。

塩川 そう。

ポチヨムキン 私の欲望をアンタが知ってるのかい？

塩川 それくらいわかります。オタクは移住囚や。ここサハリンに流されてきはった。サハリンに来る前はモスクワでお役人してはった。そやね？

ポチヨムキン そうだ。

塩川 オタクはよう言うてはったやないですか、モスクワにおった頃は、とか、モスクワは今頃って、つまりアンタはモスクワに帰りがっている。そうでしょ？

ポチヨムキン マサジユウロウ。私はね。モスクワのことを思うと涙が出るんだ。普通じゃいられなくなる。

塩川 そこに付け込んだのがあの男、デルビンや。正直に言うてよろしいで、デルビンとどんな約束したんでっか？

ポチヨムキン 約束？

塩川 まだとぼけて、ほなワテ言いましたよか。オタクは己が欲望のためにナターシャを売ったんや。

ポチヨムキン 欲望。

塩川 そう。

ポチヨムキン 私はね。昔から一度だって、自分が何をしたいのか、自覚したことはない。私には私の欲望がわからんのだよ。私は確かにモスクワへ帰りたいと思う。そのためなら何で

もする、そう思う。でもね、私はここに居たいとも思う。この島を愛してるとも思う。

塩川 どっちやねん！

ポチヨムキン どっちもなんだよ！ モスクワにいた頃のことを思うとムカムカする。クラブだのカフェだので、ダラダラとお喋りするのさ、シェイクスピアだのヴォルテルだの言うのさ、私は読んじやいない。けど読んだ風な顔をしてやった。きっと他の奴らだって同じことさ。ムカムカする思い出だ。それに比べてここはどうだ。そんな顔をする必要はどこにもない。ただ生活があるのみだ。それも恐ろしく真面目なね。モスクワか、サハリンか、私はどうすりやいいんだ。

塩川 親父さん。ここに住みまひよ。ここで三人で暮らしまひよ。ワテはナターシャを愛してま。

ポチヨムキン しかしナターシャは君のことを愛していない。

塩川 時間の問題です。あんじょう時間が解決してくれま。

ポチヨムキン しかしナターシャは君の顔が嫌いと言ってるんだ。

塩川 それこそ時間の問題や。時間が経てば、

ポチヨムキン 顔が変わるのか？

塩川 好みが変わります。

ポチヨムキン ……。マサ。もう遅いんだよ。

塩川 まだ間に合いま。

ポチヨムキン この結婚はね。ナターシャが自分で決めたのさ。

塩川は黙り込む。

ポチヨムキン デルビンのことは私もよく知ってる。だからマサの気持ちもわかる。(懐中時計を取り出し) おやもうこんな時間だ。

塩川 なんやその時計！

ポチヨムキン は？

塩川 わかったぞ、その時計で売りやがったな、

ポチヨムキン 買った、こないだ買ったの、

塩川 嘘つけ！

ナターシャが玄関から登場。手にはカゴを持っている。

二人の様子をしばし見ている。

塩川 ナターシャ

ナターシャ もうじきお見えになるわ

塩川 ワテかて、アナタをモスクワに連れていくことはできません。

ナターシャ ありがとう。

塩川 ほんまやで、

ナターシャ ありがとう。

塩川 答えてーな！

ナターシャ ……マサジユウロウ。何度も言ったでしょ。

塩川 はい。

ナターシャ 私はアナタが好きじゃないの。

塩川 それは、わかってま。

ナターシャ 私はアナタが嫌いなもの、

塩川 だからそれはわかってま！

ナターシャ 普通は、そこで終わりじゃないかしら。

塩川 ……。

塩川は目に涙を浮かべ、玄関より去る。

ポチヨムキン やれやれ。

ナターシャ (上手台所に向かって) ウオツカ！

ポチヨムキン 着替えないのか？

ナターシャ (摘んできた花をテーブルの水差しに飾りながら) 着替えないわよ。

ポチヨムキン お前の披露宴じゃないか？

ナターシャ 披露宴？ただの宴会でしょ。

ポチヨムキン モスクワから偉い作家さんだって来るんだ！早く着替えてこい。

台所からウオツカ登場。

ナターシャ お皿が二枚少ないわ。今日は6人よ。

ポチヨムキン 6人？

ナターシャ もうじきお見えになるわ。早く用意して、

ウオツカは台所に行く。

ポチヨムキン ワシ、お前、デルビン、作家、あと二人は誰だ？

ナターシャ 今朝、エゴールが知らせて来たのよ。その作家先生にどうしても会わせたい人がい

るんだって。

ポチヨムキン 誰が来るんだ？

ナターシャ 知らないわよ。だいたいその作家って誰なの？

ポチヨムキン トルストイ。

ナターシャ 誰それ？

ポチヨムキン 知らんのか？ モスクワにいた頃は本屋にいったらいらんどった。

ナターシャ ここに本屋はないわ、

ポチヨムキン 早く着替える。披露宴にトルストイが来る。モスクワでだってあり得んことだ。

馬車が近づく音。

ポチヨムキン 来た。さあ早く着替えろ。

ナターシャ これしかないの、

ポチヨムキン あの紫のはどうした？ むかし母さんが劇場に着ていった。

ナターシャ もう入らないわ。

ポチヨムキン 何だと？ 太ったのか？

ナターシャ 母さんが痩せすぎだったのよ。

ポチヨムキン こりゃすごいワシはサハリンで娘を太らせた（と、酒をあおる）

玄関よりデルビン登場。

ポチヨムキン 失礼。

デルビン アナタの家でしょ。ご自由になさって。

ポチヨムキン 乾杯の練習をしておりました。

デルビン （皿の数を見て）ウオツカ！

台所よりウオツカ登場。

ポチヨムキン （ウオツカに）さっさと皿を持ってこんか！

ウオツカは去る。

デルビン ナターシャ、着替えないのかい。

ナターシャ これしかないの。

デルビン そんなはずはない。前にプレゼントしたじゃないか。

ナターシャ それがこれよ。

デルビン (じっと見る) なんでもこんなに汚れるんだ？

ポチヨムキン ゴボウです。

デルビン ゴボウ？？

台所からウオッカの叫び声。怯えたウオッカが駆け込んでくる。

その後ろからソフィア登場。彼女の手は鎖でつながれている。

デルビン 待ってろと言ったはずだ。

ソフィア まるでオモチャみたいな家だ。

デルビン (ポチヨムキんとナターシャに向かって) 少し失礼しますよ。

デルビンはソフィアを鞭打つ。

デルビン 勝手なマネは許さんと言ったはずだ！

ソフィア (ムチを受けながらも親子に) アンタかいここに住んでるのは？

デルビン 誰のおかげでここにいられるんだ！

デルビンはさらに鞭打つ。

台所から手を鎖でつながれたピシチコフが登場。

ピシチコフ デルビン刑務所長様のお陰でございます。

デルビン 表で待ってろと言ったはずだが、

ピシチコフ 申し訳ありません。姐さんが勝手に歩き出しちゃったもんで、

デルビン フン！

ソフィアはそこらじゅうの匂いを嗅ぐ。



特にウオツカの匂いを嗅ぐ。ウオツカは怯える。

ポチョムキン デルビンさん、こちらは？

デルビン もちろん、お客さんだよ。

ピシチコフ どうも。お招きに与かり光栄です。私、ピシチコフと申します。こちらはソフィア。

ソフィア (ポチョムキンに) アンタかい。私の話を聞きたいってのは、

デルビン 違う。まだお越しになってないようだ。

シーン② 1890年作家はサハリンにやってきた。

字幕「1890年 作家はサハリンにやってきた」

サハリンの荒野を歩く作家チエーホフ。

隣には案内人の移住囚であり、デルビンの召使いでもあるエゴールが従う。

チエーホフはしきりにメモをとっている。

朗読

ここサハリンはロシアの流刑地だ。罪を犯しサハリンに送られる罪人は大きく二つに分けられる。移住囚と懲役囚だ。移住囚はサハリンに移り住むことを命じられた者たちで、人によってはロシア本土から家族を引き連れて来る者もいる。ちなみに彼らの中には刑期を終えてもサハリンに住み続ける者もいる。懲役囚は刑務所につながれたものたちである。彼らの多くは両手を鎖でつながれ、人によっては手押し車に括りつけられたもの、髪の毛を半分だけ刈り上げられた者もいる。刑務所のほとんどは炭鉱のそばに建てられ、懲役囚たちはそこで働かされるのだ。彼らには人間としての更生などまったく期待されておらず、ただこの島を開発するための安上がりな労働力でしかない。

サハリンにやってきて1か月が過ぎた。この日、私は島の南部、西海岸沿いにある「十

字架村」にやってきた。村の住民はおよそ101名。うち男子76、女子25名である。世帯主47のところ同居人が23名。正式な家族は4組、内縁関係にあるもの15組、自由身の女性はわずか2名。ここ十字架村は海が近く、むかし日本人が多く居た頃は昆布漁の産業基地として栄えたようだ。今も日本時代の住居が多く残っているが、彼ら夏しかここには住んでいなかったようで、移住囚たちには酷く評判が悪い。私は南サハリンの刑務所である人物に出会った。名前はデルビン。まだ若いがやり手の刑務所長として一目置かれる存在だ。私は彼に懲役囚に合わせてほしいとお願いをした。しばらく考え込んだ彼はこう言った。「よろしい。では明日の披露宴に招待いたしましょう」「披露宴？誰の？」「もちろん。私の披露宴ですよ」。

こうして私は彼の結婚披露宴に招かれることになったのである。

### シーン③ デルビンは嫌な奴

チエーホフとエゴールはポチョムキンの部屋の中にいる。

テーブルには食事の準備がされ、デルビン、ポチョムキン、ピシチコフ、ソフィア、ナターシャがいる。

デルビン 皆さん、ご紹介しましょう。現在、サハリンに滞在中であります。作家先生です。

チエーホフ どうもアントン・パーヴ、

デルビン (遮るように) これがナターシャ、もうじき私の妻になります。

ナターシャ お目にかかれて光栄です。

デルビン で、こちらが私の義理の父ポチョムキンです。

ポチョムキン どうもポチョムキンです。私はモスクワにいた頃、先生の御本が売られているのを見ることがあります。

チエーホフ それはどうも。

ポチヨムキン まったく光栄です。我が家始まって以来の名誉だ。まさかこの家にアナタをお迎えするなんて、私はねアナタの本を見て、なんて素晴らしいタイトルなんだって、いつも感心してたんです。

チエーホフ ありがとうございます。次はぜひ手に取って中身も読んでください。

ポチヨムキン しかし、ずいぶんお若いのですな。私はてっきり自分より上か、同い年くらいかと思っております。それに髭が、

デルビン (遮って) そしてこれが、ピシチコフ、

チエーホフ ……どうも、

ピシチコフ お目にかかれて光栄です。

デルビン この男はね、自分の女房を殺したんです。

ピシチコフ どうも無作法なもので、お恥ずかしい。いえ、私なんて大したことありませんよ、こっちにいる姐さんに比べたら、

デルビンはピシチコフを鞭打つ。

デルビン で、こちらがソフィア。聞いたことあるでしょ、ソフィア・ブリュフシュテイン。

チエーホフ、ポチヨムキン、ナターシャはその名を聞いて身構える。

デルビン そうです。サハリンの脱獄王。いや女王か。脱獄。刑務所で働く人間にはたまらん響きですよ。それもこの女の手口がまたすごい。看守を色仕掛けで落とすんですからね。そ

れも一緒に逃げた看守は必ず殺される。えっと、何人だっけ？

ピシチコフ 四人です。

デルビン どうですこれ以上ない小説のネタでしょ、

チエーホフ はあ、

デルビン いや礼には及びませんよ。こいつらにとっても自分のことが小説になるなんて名誉な

ことですから、

ピシチコフ おまけにウオッカにまでありつけて、ありがたいもんです。

デルビン それでは乾杯といきましょうか。しかしこの役回りは花婿がやることじゃないな。でもまあしかたありますまい。ここサハリンは恐ろしく人材難で私程度の能力の者でも、ありとあらゆる仕事をさせられる。(片手にグラスを持ち、その匂いをかぐ) (台所に) ウオッカ!

台所からウオッカ登場し、

デルビン 乾杯はラムをお出ししろ、

しかしウオッカに言葉は通じない。戸惑うばかり。

デルビン 初めはラムだ!

しかたなくナターシャが皆にラムをつぐ。

デルビン サハリンは御覧の通りです。花婿が乾杯の挨拶をしなくちゃならんし、花嫁がラムをついでまわらなきゃいかん。そうそう。ややこしいので説明しておきますが、これはギリヤークです。これの父がとんでもなく酒好きでしてね。昔はサハリンのギリヤークのなかでも島で1, 2を争う凄腕の漁師だったらしいのですが、われわれがこの島に来て、我々と付き合ううちに、われわれ同様、アルコールの信者になってしまった。それも熱心なね。ウオッカのためなら何でもする男になってしまい、漁の道具から何から何まで売って、しまいには自分の娘をウオッカ一瓶と交換してしまった。つまり、ウオッカと交換されたから、名前をウオッカというわけです。

それぞれのグラスにラムが満たされる。

デルビン さあ、それでは乾杯しましょうか。サハリンに生まれた新しい夫婦に、乾杯！（さっ

そく飲み干し）苦い！ 苦い、苦い！！

と言って彼はナターシャにキスをする。

皆の白々しい拍手。

ポチョムキン （自分の手を見つめ）おかしい。変だぞ。

チエーホフ どうしたんです？

ポチョムキン これは私の手ですか？ 叩いても、ちっとも痛くない。

デルビン おやおや。それは困った。

ピシチコフ 素晴らしい！ まったく素晴らしい！私はこれまで何度も披露宴には出席しまし

たがね。こんなに心のこもったのは初めてですよ。ナターシャさん、旦那さんを大事にな

さいよ、

ナターシャ ありがとう。

チエーホフ （スープを少し飲み）これは？

ナターシャ チョウザメのスープです。

チエーホフ 変わった味ですね。食べたことない味だ。

ナターシャ ここのチョウザメは独特の味でしてね。臭み消しに「ゴボウ」を入れるんです。

チエーホフ ゴボウ？

ナターシャ 日本人から教えてもらったんですよ。大きな葉をした草の根っこです。

ソフィア 土の味。

ナターシャ それがゴボウの味です。

ピシチコフ それではこの辺で私からお二人にお祝いのメッセージを述べさせていただきます。

すでにご存じの方もいるかもしれませんが、この村が「十字架村」と名付けられたのは、

私たちロシア人の言動が大いに関係しております。昔、ここにロシア人がやってきた時、土地のギリヤークを二人殺してしまった。そのうち一人がシャーマンで死ぬ間際に「この島は何の役にも立たなくなるだろう」そう予言した。まさにその通りになったわけですが、私が言いたいのはこちらからです。私たちロシア人はここにその罪滅ぼしとして十字架を立てた。つまり私たちは反省しているわけです。もちろん神はお見捨てにはなりません。その証拠がこの二人であります。かつてこれほど祝福されるべき男女があったでしょうか。しかもロシアを代表する作家、レフ・ト、

デルビン (遮るように) あの話をしてくれたまえ、  
ピシチコフ は？

デルビン ほら、あるだろ、君にしかできない話だよ、

ピシチコフ しかし……、

デルビン 君は何のためにここに来たんだね。

ピシチコフ よろしい。先ほどご紹介いただきましたが、私は妻を殺しました。それも妊娠中の妻を殺したわけですから、まあ自分の子供も殺したわけです。私と結婚する前、彼女にはとても素敵な相手がおりました。二人は惚れ惚れするほどよいカップルでした。恋にいちずな者だけがもつ、あの神聖な輝き。まさに二人は光輝いていた。ところが様々な事情が二人の仲を引き裂きます。泣き崩れる彼女をなぐさめたのは私でした。そのうち彼女は私の支えなしでは生きていられなくなり、まあ私と結婚したわけです。

チエーホフ それで、どうして、その、  
ピシチコフ わかりません。ただお腹が大きくなった妻を見て普通の気持ちではいられなくなつたんです。そこで妻を縛り上げ酷いことを続けるうちに、気が付けば六時間もたつていました。

チエーホフ その時、あなたは何を考えていたんです？

ピシチコフ つまり、次はどこを蹴ろうかとか、どこを殴ってやろうかとか、

チエーホフ あなたは疑っていたのではないですか？

ピシチコフ 何を？

チエーホフ つまりお腹の子が本当に自分の子供かどうか、もしかしたら、  
ピシチコフ それはありません。だって私たちにはその時もう三人も子供がいたんです。

チエーホフ え？

ピシチコフ だからお腹の子は四人目でした。

デルビン お前は嫉妬していたんだよ。

チエーホフ しかしそれだけ時間が経っていて、

ピシチコフ 私たちは幸せな家族でした。

デルビン お前はずっと嫉妬してたんだよ。心のどこかでずっとな。お前は幸せだったかもしれ

ない。だがその幸せを憎むお前もいたんだ。そうだろ、ピシチコフ。

ピシチコフ かも、しれません。

ピシチコフはびっしり汗をかき、憔悴した様子。

デルビン これがサハリンです。これがサハリンですよ先生。

チエーホフ デルビンさん。

デルビン 何です？

チエーホフ 私は小説のネタを探しにここにやって来たものではありません。

デルビン ほう。それじゃ何のために？

チエーホフ 私は、サハリンが知りたくて、

デルビン だから何のために？

チエーホフ それが、……わからなくなってきたんです。

デルビン は？

チエーホフ 出発する前は、もっとわかっていた気がする。けれど、今は自分がどうしてここに

いるのか、

デルビン おやおや。さすがサハリンだ。

デルビンは笑う。

突如、ソフィアがチェーホフにグラスの酒を投げつける。

デルビン このアマ！

デルビンは鞭打とうとする。

チェーホフ 待ってください！

ソフィア 気持ち悪い男だ。

チェーホフ この人をぶたないで、

ソフィア むしずが走る。

チェーホフ 私のどこが気に食わないんです。

ソフィア 嫌だ嫌だ。

チェーホフ 何が嫌なんです。

ソフィア それにしてもおかしな家だ。こんなの見たことないよ。

チェーホフ どこが変なんです。

ソフィア あんた医者みたいな喋り方だね。

チェーホフ それはどうも。

ソフィア 脈を診てちょうだい。

デルビン いい加減にしろ、

チェーホフ よろしい。

チェーホフはソフィアの脈を診る。

ソフィア (手の温もりにうっとりし) アンタ、トナカイのはらわたに手を突っ込んだことがあ

るかい？



チエーホフ ……。

ソフィア 私はあるよ。温かった。今のアンタの手のようにね。

チエーホフ ……。

ソフィア 私はね。神様ってのは優しくて困った人は助けしてくれると思ってんだ。けどどうじやなかった。神様は優しくない。困った人を助けなくてもくれない。それじゃ神様って何なんだろうね。

ポチヨムキン (すでに泥酔し) 神様はお忙しい。それだけは確かだ。

チエーホフ (脈をはかり終え) 九八。酒飲んでこれなら、まあ正常でしょう。

ソフィア ハハハ。ホントにお医者さんみたいだ。

チエーホフ アナタ、本当に四人も殺したんですか？

ソフィア 私が殺したんじゃないよ。

デルビン 嘘つけ。

チエーホフ デルビンさん。こんな話を聞きました。この島で一番人気のあるスポーツは、脱獄囚狩りだと。脱獄の話を知ると皆して銃やナイフを持って森の中を走りだすそうじゃないですか。殺してしまうこともあるそうですね。

デルビン いや、めったにありませんよ。

チエーホフ しかも、それは罪には問われない。

ソフィアはもう片方の腕をだし。

ソフィア こっちも診てよ。

チエーホフは驚くが、しかたなく脈を診る。

デルビン 脱獄囚は国家の財産です。それを殺すのは犯罪です。もちろん見つけ次第、処罰します。

ソフィア どうして頭の良い男って子供っぽいのかしら、  
チエーホフ ……。

ソフィア 私はね。世の中を二つにわけてるの。自分に関係のあることと、ないこと。どうわかりやすいでしょ。でも関係ないことがつきまどってくるのよ。鬱陶しい。私のせいじゃないのに、私は関係ないのに。だから私は逃げるのよ。

ポチョムキン でも逃げきれない。

チエーホフ 九八。

ソフィア 一緒？

チエーホフ 君は心臓が二つあるのか？

ソフィア ？

デルビン ダメですよ怒っちゃ、これがサハリンですからね。

チエーホフ アナタはどんな罪を犯してここに来たんです？

ソフィア 殺人。

チエーホフ 誰を殺したんです。

ソフィア 旦那。

チエーホフ なぜ？

ソフィア 自分を守るためよ！いつだってそう。自分を守るために戦ってきた。でもそれが神様には気に食わないのね。もっと人の為にくさなきやいけないのね、きつと。それで罰として私はここに連れてこられたの。でもここじゃますます私は私を守らなくちゃいけない。だからますます神様に嫌われる。もしかしたら、私は神様から自分を守らなくちゃいけないのかもしれない。

ポチョムキン 誰だ！神様の悪口を言う奴は。いいか。神様はな。確かにわれわれ人間を出来損ないにつくられた。でもそのかわりこの世にアルコールもお遣わしになったのさ！

ポチョムキンはすでに泥酔の有り様。笑いながら床に倒れる。

その笑い声に紛れて屋外から「おーい、ほほーい」と声がする。

声の主は塩川。

チエーホフ うん？

「おーい、ほほーい」

チエーホフ 何ですか、あの声は？

ナターシャ いえ、あの、

「おーい、ほほーい」

デルビンは窓から声のする方を見る。

声はやむ。

デルビン あの日本人か、

ナターシャ さあ

チエーホフ 日本人？

デルビン ええ。この村に住んでる。と言っても夏だけですがね。この家とはずいぶん仲良しみたいでね、ナターシャはロシア語も教えてやったそうなんですよ。

チエーホフ ぜひ会ってみたいですね。

デルビン そのゴボウとやらもそいつに教えてもらったのか？

ナターシャ (うなづく)

デルビン (玄関に) エゴール！

玄関からエゴール登場。

デルビン いまそこに日本人が隠れた。ここに連れてこい。

ナターシャ やめて。

デルビン 連れてくるんだ。

ナターシャ やめましょ、

デルビン 早く行け、

エゴール どこにいるんだ？

デルビン そちらへんだ。

エゴール どこら辺？

デルビン 自分で探せ！

エゴール 誰を？

デルビン 日本人だ。

エゴール どんな？

デルビン 知るか！

エゴール (笑いながら) お前も知らないのにどうやって探すんだよ。

デルビン (台所に) ウオツカ！

台所からウオツカ登場。

デルビン 日本人を連れてこい。わかるな、日本人だ。

ウオツカ (うなづく)

デルビン エゴール。お前も行け。

エゴール どこに？

デルビン この娘についていくんだ。

エゴールとウオツカは玄関から出てゆく。

ナターシャ 何するつもり？

デルビン (ナターシャを無視して) さて、作家先生。あなたの興味がどうあれ、ここに来た以上はここがどんなところか、アナタは知らなくてはいけない。私の意見では、ここは囚人たちにとって過去を償うところであると同時に、輝かしい未来をつくるところでもある。そう開発です。この島は実に豊かだ。炭鉱、森林、漁業。その開発の担い手こそ、ここにいる囚人たちなのです。モスクワはつまりサハリンに足は向けられないというわけです。

チエーホフ 売春。賄賂。殺人。窃盗。疫病。リンチ。虐待。搾取。この島には満ち満ちているじゃありませんか。

デルビン 私にはね。覚悟があります。まともな社会なんてそんなものは、われわれのずっと後の子孫のとりまえなんですよ。いいですか、まあ仮に、この島の二千の人口―それはもちろん、どうしようもない連中ばかりですが―そのなかに、教養ある人物は私と先生の二人きりだとします。言うまでもなく、私たちは、周囲の無知蒙昧な大衆にうち勝つなどということは、とてもできません。一生のうちには、私たちも段々譲歩しなければならなくなって、やがて群集のなかに紛れ込み、私たちの声も、現実のくだらないあれこれにかき消されてしまう。だからと言って、私たちはむなしく消えるのではない。なんの影響も残さずに終わるわけではない。私たちの後に、私たちのような人が、こんどは六人でくるかもしれません。それから十二人、それからまた……というように殖えていって、ついには私たちのような人が、大多数をしめることになるでしょう。二百年後、三百年後の生活は、想像もおよばぬほど素晴らしい、驚くべきものになるでしょう。その時、ようやくサハリンは役割を終えるのです。

チエーホフ (拍手) 素晴らしい。いつか芝居のセリフにでも使わせてもらいますよ。

デルビン 私は本気ですよ。

チエーホフ 二つ疑問があります。アナタは私とご自分を特別な人間のように言いましたが、私だって無知蒙昧な大衆とかわりはありませんよ。もう一つ、周りを御覧なさい。白け切っている。どうすればアナタのような強い心臓を持てるんですか？

デルビン 一つ。先生、残念ながら私たちが特別な人間なんです。特別な責任を背負わされた人間なんです。だからアナタもサハリンに来たんですよ。二つ、ご指摘ごもっとも(周囲

(に) 失礼。では聞き役に回るとしましょう。

シーン④ ウオツカとエゴール。

野原。日本人塩川を探すウオツカとエゴール。

エゴールは身振り手振りを交えて言葉を伝える。

エゴール あんたならどうする？

ウオツカ シジガ〈sidznga〉(なにが?)

エゴール だからパンによ、チーズをのせて食べたいのさ、でもそのまま口にはこんじゃ、チーズが上あごにつくだろう？ 上あごは味を感じねーわけだ。味は舌で感じるからな。つまりだから、パンにチーズを乗つけちゃなんねーってことだ。チーズの上にパンを乗つけなきゃなんねー。

ウオツカ クツチ〈kucchi〉(おちる)

エゴール そう。落ちるんだ。たいていの場合チーズってのはパンより小さいからな。口に入れる前に落とすちまう。こりゃいったいどうすればいいんだ。

ウオツカ (笑う)

エゴール あんた名前は？

ウオツカ タゴリ〈taghori〉(わからない)

エゴール おれ、エゴール。アンタは？

ウオツカ ウオツカ。

エゴール 違うよ。そりゃそう呼ばれてるだけだろ？ 名前だよ。名前。

ウオツカ (黙り込む)

エゴール デルビンは可哀そうな奴だよ。あいつは俺と二人でいる時はすごくいい奴なんだ。誰も信じないけどね。優しい奴なんだ。ところが大勢の前だと人が変わっちゃう。俺は友達

として忠告してやったこともあるよ。それじゃ誤解されるよってね。だけどダメだな。

ウオツカ (さえぎるように) タルグーク、

エゴール え？

ウオツカ タルグーク。

エゴール タル、

ウオツカ タルグーク。

エゴール タルグーク。

ウオツカ (うなづく)

エゴール タルグーク。うん。タルグーク。素敵な名前なんだろうね、きっと。

ウオツカは塩川を見つけたようだ。

二人は走り出す。

シーン⑤ サハリンルーレット

居間に塩川もいる。

塩川 塩川正十郎。近江と美濃の境大垣の生まれ。元は武士なれど幼き頃にご一新を迎え、一族の猛反対を退け商いの道を志す。京の昆布問屋に奉公に上がり、一五歳の時に商いの用により初めてサガレンにきたれり。以来十年、この島に住んでおる。夏だけ。

チエーホフ 商いとは何をされているんです。

塩川 昆布、鰯、数の子の買い付け。

デルビン (台所に向かって) ウオツカ。

チエーホフ 先ほどは何をしていたんです。

塩川は膝をつき、

塩川 拙者、お願いの儀ありまかり越した。デルビン殿、いざ尋常に勝負！

と、手ぬぐいをデルビンに投げつける。

一同驚く。

ウオツカがやってくる。

デルビンはウオツカに耳打ち、

チエーホフ 何の為に？

ナターシャ やめて。

塩川 ナターシャ。

ナターシャ 帰って。

塩川 もう忘れたんか。君ら親子がここに来た時のこっちゃ。この家はむかし日本人が住んどつた。冬になるとスキマ風だらけや言うて、秋のうちに一緒に直してあげた。

ナターシャ そしてあなたは冬にはいなかった。

塩川 食べ物かてそうや、冬になったら食べもんない言うさかい、鮭やら鯿やら仰山みつくりうて、

ナターシャ そしてアナタは冬にはいなかった。

塩川 君は知らんやろけどな、君に送った西陣の着物。あれ、けっこうええ値すんねんで。

ナターシャ はいはい。ありがとうございます。

塩川 ちゃうがな。恩着せがましゅう聞こえたらごめんやで。ただこんなことあったなー思て、喋ってるだけやん。

ナターシャ 感謝しております。

ウオツカが小さなグラスを六つ持ってくる。



デルビン 決闘と言われても、それはできませんよ。

デルビンはポケットから小瓶をとりだし、蓋をあける。

デルビン 私は責任ある役職についてますからね、命を粗末にはできんです。

デルビンは瓶から一滴、グラスに落とす。

ナターシャ 何を入れたの？

デルビン 地獄の番犬ケルベロスの涎から生まれた花はなんでしょう？

チエーホフ トリカブト。

デルビン 正解。

デルビンは6つのグラスにウォッカを注ぐ。

デルビン ナターシャ。君はどうして私と結婚するんだい。

ナターシャ デルビン。私だってね。アナタに負けないくらい性格が悪いの。

デルビン ほう。

ナターシャ だから知ってるの。アナタ、二人きりの時はそんなにバカじゃないわ。

デルビン (塩川に) ですって。

塩川 ナターシャそれはおかしいで。それじゃこの男がただマシってだけで、

ナターシャ ええ。マシなだけよ。でもここじゃそういう選び方しかできないのよ！これ(デル

ビン)か、これ(塩川)か。

ポチヨムキン ナターシャ、そういう時はね。自分はここにいないと思うんだ。ここにいないけど、

ここにいない。いるけど、いない。やってらん。

ナターシャ　できるか！

ソフィア　地獄の涎に決めてもらうんだね。

デルビン　塩川さん。どうぞこちらへ。

塩川とデルビンは椅子に並んで座る。

ピシチコフが二人に目隠しをする。

ポチヨムキン　ここにいるが、ここにいない。(以下同じ事を繰り返す)

デルビン　先生。私はね。この人生を存分に働きたいと思う。でも同時につまらないことで命を

落としたいとも思う。なんでしょうね、これは。

チエーホフ　バカなことはやめなさい。アナタは疲れてるんです。

デルビン　よく見てください。これがサハリンです。

ピシチコフがグラスをシャッフルする。

塩川　(目隠しのまま、グラスを手に取り) 南無八幡大菩薩！

塩川がグラスを飲み干す。

多少むせるが、毒は入っていないようだ。

デルビン　(グラスを手に) サハリンに！

デルビンが飲み干す。毒は入っていない。

チエーホフを除き、皆が盛り上がる。

チエーホフは残りのグラスの液体を捨ててしまう。

そして素早くウォッカを入れなおす。

ポチヨムキン、ナターシャ、ソフィア、ピシチコフはあっけにとられる。

ポチヨムキン トルストイ先生？

チエーホフ（耳元で）私はアントン・パーヴロヴィチ・チエーホフです。

チエーホフは帽子をかぶり玄関より去る。

デルビンと塩川の勝負は続く。

字幕「1890年夏 チエーホフは三か月間サハリンを調査した。彼は次に長崎に行くことを望

んだが、日本でコレラが流行していることを知り、そのまま香港にむかった」

一幕終わり

字幕「1891年 滋賀県大津にて来日中のロシア皇太子が警備の警察官に襲われる」

字幕「1904年 日露戦争はじまる」

字幕「1905年 サハリン（樺太）の南半分が日本の領土になる」

字幕「1910年 韓国併合」

字幕「1917年 ロシア革命」

字幕「1918年 革命を牽制するため日本はシベリアに出兵する」

字幕「1920年 アムール川河口にてソ連軍が地元民及び日本軍を虐殺」

字幕「1920年 同年の虐殺事件に対処し日本はサハリン（樺太）の北半分も占拠」

## 第二幕

### ◇登場人物

塩川正十郎（塩川農場の主）

マーシャ（塩川とナターシャの娘）

上村（うえむら）もとこ（エゴールとタルグークの娘）

上村源太（もとこの兄）

イ・ヨン（朝鮮から来た男）

キム・チャングム（ヨンの妻）

荒木（樺太で成功をおさめた医師）

宮沢賢治

◇二幕のあらすじ

日露戦争により南樺太を得た日本は、日本列島及び朝鮮半島からも労働者を集め、樺太の開発を進めています。かつて「十字架村」と呼ばれた村も野田町と名を改め、ポチヨムキン一家が暮らした家では、塩川が亡き妻ナターシャの忘れ形見である娘のマーシャと共に農園を営んでいます。農園には、岩手花巻農学校から教師宮沢賢治が教え子の就職を世話するためにやって来ましたが、同じように朝鮮半島からも若い夫婦（イ夫妻）もやって来ました。またマーシャに思いを寄せる日本人医師荒木は、必死の思いで結婚を申し込みますが話は脱線を繰り返します。さらに近所に住む上村兄妹の日本語を巡る喧嘩も勃発し、事態は収拾のつかないまま、喜劇的大団円を迎えます。

シーン① 塩川農場の人々

字幕「1923年、作家は樺太へやってきた」

樺太の南西部にある「野田町」。

ここに塩川農場がある。

舞台は塩川農場の広い玄関。人々は土足で出入りする。来客はここで対応され、町の人々にとっても憩いの場になっている。エントランス兼応接間といったところ。テーブルが二つ。

椅子がそれぞれに三つある。上手は塩川家の台所（奥と呼ばれる）につながり、下手は玄関先につながる。

季節は夏の終り頃。

テーブルにはもんどこ。クリームソーダをストローでぶくぶく吹いている。

玄関先から声。

声（宮沢） もうしー。花巻農学校からきた宮沢どいいます

もんどこはぶくぶくをやめない。

声（宮沢） もうしー。

革の旅行カバンをもった宮沢が下手玄関より登場。

もんどこ 誰もいないよ。

宮沢 （誰もいない机に向かい） ああございだのすか？

もんどこ は？

宮沢 （誰もいない机に） じゃ、サイダーすか。それだばすきつとするべない。

玄関先からもんどこの兄上村源太の声。

声（源太） お邪魔します。

もんどこ お兄ちゃん。（と、上手に隠れる）

源太、下手玄関先から登場。

源太 あんた宮沢さんか？

宮沢 はあ。

源太 役場にはもういったかね。

宮沢 はあ。

源太 でしょうな。これ（と書類をみせる）全部忘れてましたよ。

宮沢 じゃ、どうも。これはまんつ、

源太 しっかりしてくださいよ先生。

宮沢 （書類を調べて）あの、

源太 はい？

宮沢 ノート、ねがったべが？

源太 ああ帳面ね、ありましたよ。

宮沢 あったすか。

源太 ええ。

宮沢 ……。

源太 預かっておきましょう。

宮沢 はあ？

源太 あの帳面は私が預かっておきますよ。先生はご自分の仕事に専念なさってください。もちろん樺太をお帰りになるときにお返しします。

宮沢 けーしてけで！

源太 妹さんがお亡くなりになったこと心からお悔やみ申し上げます。

宮沢 読んだんだべが？

源太 しかしですな先生には大事なお仕事があるはずですよ。あなたは樺太に何をしにきたのですか？

宮沢 けーしてけでじゃ！

源太 これからの日本を背負う生徒の皆さんの就職先を探しにきたのでしょ。紹介状を忘れるよ  
うではとても見つかると思えませんな。

宮沢 誰だ？おまはん

源太 申し遅れました。私は上村源太と申します。ここ野田町でお困りになるようなことがあればいつでもご相談ください。

源太は飲みかけのソーダを見つける。

源太 もとこ！

源太は部屋を探す、もとこは素早く逃げ回るが、見つかる。

源太 学校はどうした！

もとこ源太は部屋を走り回る。奥より塩川正十郎が登場。

もとこ ニヴィジウギジ〈ni vidz ykidz〉(行きたくないもん！)

源太 チシズムジツルイツツヤー〈chi sizm dzitr itt ya〉(こら！日本語を使いなさい！)

もとこ だって私日本人じゃないもん！

もとこは下手より去る。源太もそれを追って去る。

塩川 あの目、みはりましたか、

宮沢 ええ。あれは日本人なんだべが？

塩川 ロシアですわ。

宮川 ロシア？

塩川 ああ、さっきのはギリヤーク語。父親がロシアで母親がギリヤーク。そやし日本人の血はひとつも入ってへん。

宮沢 んだべない。

塩川 いや、そない言うたら怒られまんな。本人は必死に日本人になろおもて勉強してるんやさかい。

下手よりマーシャが帰宅。

マーシャ お父ちゃん。

塩川 なんやマーシャ、農場いったんちゃうんか？

マーシャ 帰ってきたのよ。そちらは？

宮沢 あ、失礼いたしました。わだしは花巻農学校から来た宮沢といいます。

塩川・マーシャ 花巻？

宮沢 んだ。いわでの、はなまぎの、

塩川・マーシャ はあ、

宮沢 野田まぢの役場（やぐば）の方から聞いてるかと思うども、ここの農場の方で人手を探してるこのことで、

塩川 はいはい。私ここで農場やつとりま塩川正十郎います。こっちは娘のマーシャ。

マーシャ マーシャです。

宮沢 あの、へで、ウチの学校のほうにいさ案内ば来たもので、

塩川 はいはいはい。出しました。出しました。

宮沢 ありがとがんす。今日は生徒の紹介状ば持ってきたのす。

塩川 いやーそれはわざわざ。はいはい見させていただきます。

マーシャ （止めるように）お父ちゃん。

塩川 （書類を見ながら）いやー、樺太のこれからはこういった若い力が必要です。

宮沢 ありがとがんす。

塩川 そのー、樺太の農場は本土とは全然ちやいます。まずは土地が広い。それに米はつくりませんよって、新しい野菜も研究せんといかん。こういった専門的な知識は力強いかぎり



すわ。

宮沢 はい。

塩川 (ボタンと書類を閉めて) ぶぶ漬けでもどないです？

宮沢 はあ？

塩川 まあまあ、ぶぶ漬けでもどないでつか？

宮沢 ぶぶ？

マーシャ すいません。もう人が決まっちゃって。

宮沢 へ？

マーシャ 今日にも来はるんです。

塩川 堪忍しとくんはれや。一步遅かった。

宮沢 ……んだすか。

宮沢はがっくり肩を落とし玄関先に向かう。

宮沢 あ、んだ。さぎかたの男。

塩川 ああ源太でつか。

マーシャ 源ちゃんがどないしたん？

宮沢 ノートを取られたのす。どこにいるべが？

塩川 前の道を北に折れたらエゴール食品いう乾物屋がありまっさかい。たぶんそこにいますわ。

宮沢 エゴール？

塩川 あれの父親の名前ですわ。元はロシアの囚人。そのままサハリンに棲みつきましてな。嫁がギリヤークでね。二人で商売してます。さっきの子はそのボンボンですわ。

宮沢 んだすか。

マーシャ 悪い人やおまへんねんで。ちょっとクセあるだけで。

宮沢 んだなハ。んだばけえります。(誰もいない机に) んだな。お兄ちゃんもサイダーを飲まねばな。

宮沢は下手に去る。この時、鞆を忘れる。

塩川 何や今の？

マーシャ さあ。

マーシャは台所に去る。

シーン② 申し込み者来る。

玄関先より荒木がやってくる。

塩川 あら、先生、ようおこし。

荒木 どうも。はい。

塩川 どうぞ座つとくんははれ、しかしそないに改まって今日はどないしはりました？

荒木 いえ、その、はい。実は、他でもありません。あなたに折り入ってお願ひがありました、

塩川さん、私はこれまで何度もあなた方に助けて頂いて、そのいわゆる、あの、すいませ  
ん、少々興奮しております、塩川さん。

塩川 はい。

荒木 実は今日お伺いしたのは……お宅のマーシャさんと結婚させていただきたく。

塩川 えー！なんやて！先生、よく聞こえなんだ。もいっぺん、もいっぺん、

荒木 私はお宅のお嬢さんと、

塩川 ああ！なんとまあまあ。これはめでたい。盆と正月と花まつりがいっぺんに来たみたい  
や。今日がこんな日になるやなんて思てなんだ。

荒木 あの、では、御承知いただけるのですか？

塩川 承知も何も、アンさんはこの町でただ一人のお医者さんや、そんな人に娘をやるやなんて、こんな嬉しいことありますかいな。

荒木 ありがとうございます！ただマーシャさんのお気持ち、

塩川 なにあれが嫌がりますかいな。いつも二人して話してまんにゃ、樺太が日本のもんになつてからこっち、ここいらにもぎょうさん日本人が乗り込んできよったけど、威勢がええばっかりで、中身はなーんもあらへん。昼間から酒飲んで偉そうなことを言うてる奴ばっかりや。まともな人はアンタだけ。何より酒を一滴も飲まんちゅうのが素晴らしい。

荒木 はい。酒は体に悪いです。

塩川 すぐにあれ呼んできますからな。まっとくんなはれや、(奥に) マーシャ、マーシャー！！

マーシャ (奥から声のみ) はい。

塩川 なにしとるんや。お客さんやはよ出てこい。

マーシャ (声のみ) まっとおくれやす！

塩川は宮沢の忘れものを見つける。

塩川 あら、これはさっきの。(奥に) おーい、わしはな、ちょっと届けもんするさかい。

マーシャ (奥から) え？

塩川 (荒木の肩を叩き) あんじょうたのみまつせ。(奥に) ほな！行ってくる！

塩川は下手に去り荒木一人になる。

ポケットからウオッカの瓶をだし、飲む。

荒木 もうやめた酒はやめたぞ、この一口でもう飲まない(飲む) あー、緊張する！！ これで最後だ。酒の力を借りるのもいい加減にせねばならん。なにせ俺は酒は一滴も飲まないことに(飲む) よし！ もう酒はやめたぞ！

マーシャ登場。荒木は慌てて酒を隠す。

マーシャ あら、なんや荒木先生かいな、すいませんお待たせして、お父ちゃんは？

荒木 忘れ物があつたみたいで届けに行かれました。

マーシャ そうですか、すんまへん。あら嫌やわ、わたし前掛けなんかして、最前まで奥で枝豆を干そうおもて、どうぞお座りください。

荒木 は、はい。(と、座る)実は今日は折り入ってお話があつて参りました。マーシャさん。ご承知の通り私は樺太が日本のものになってからこちらに渡ってきた新参者です。最初の頃はそれはもうひどい有様でした。医者のかせに体を壊してこちらで療養させてもらったこともあります。あの時、アナタのお母さま、ナターシャさんにつくってもらったチョウザメとゴボウのスープ。ナターシャさんは命の恩人であります。

マーシャ おおきに。お母ちゃんもあの世で喜んでる思います。

荒木 また私の病院はオタクの農場と隣り合わせに建っております。私の病院にございます四本の楡の木は、まるで私と貴方がた家族のように、

マーシャ お話中すんまへん。あなた今、お宅の病院に何があると仰いました？

荒木 楡の木です。あの四本の木はまるで私と貴方がた家族のように、

マーシャ まあびっくり！すごびっくり！あの楡の木がお宅のものですって？アホなこと言わんとつておくれやしや。あれはずっとずっと前からウチのものでございます！

荒木 クワッ！ クワッ！いま何と仰いました？あの楡の木がお宅のですって、マーシャさん、あなたご自分が何を仰っていることがわかっていのですか？

マーシャ わかっています。ウチの小麦畑のウチの沼の向こうに立っているあの四本の楡の木のことでござんしょ、あれは正真正銘ウチの土地に立つウチの木です！

荒木 いやいやあれはウチの木です。

マーシャ まああなた正気ですか？あれはずっとずっと昔、私の祖父がロシア帝国から頂戴したものですのよ。

荒木 ええ。知っていますよ。アナタのおじい様。モスクワで役人なさっていたが汚職でこちらに

「転勤」になった方ですよ。それにしても驚いたすっかり忘れていらっしやる。三年前あの土地は貴方がた家族から私が買い取ったじゃありませんか、思い出されましたか？

マーシャ 呆れた。あなたこそしっかりとってくださいな。確かに譲りいただきましたけど、それはあの四本の楡の木より北側をお譲りしたんでございますわよ。

荒木 馬鹿な、私が買い取ったのはあの四本の楡の木まで、つまりあの木は私の土地にあるわけです。

マーシャ 「より」です！

荒木 「まで」です！

マーシャ アホらし、阿呆らし屋の鐘が鳴りまっさ。

荒木 意味不明なことは言わんでください。

マーシャ なんと仰ろうとあの土地はウチがお国から頂戴したものです。

荒木 目を覚ましてください。ロシアはもうありません。そして樺太は日本のものです。

マーシャ そもそも、ここサハリンが日本のものやなんてウチにはちゃんちゃら可笑しおすわ。よろしおすか、さかのぼれば1875年、日本のお偉方がなんと仰ったか。はっきりサハリンは要らないと仰ったんでっせ。日本やないと。

荒木 おやおやマーシャさん。歴史にお詳しいんですね。それじゃ1905年に何があったかもご存知でしょ。アナタの愛するロシアが負けてここ樺太は正式に日本のものになったんですよ。

マーシャ ええ、ええ、よう存じてます。ウチはまだ七歳でしたけど、母が教えてくれました。お互いに戦争やめよか言うて話し合ってる最中に攻め込んできはったんやね。ほんま日本らしい、せせこましいやり方ですな。

荒木 言いたくはありませんけど、お嫌ならお国に帰ったらどうです。

マーシャ なんて残酷な！なんて情のない！

荒木 なんと仰ろうとあそこはウチの土地です！

マーシャ いえ、ウチのです！

荒木 ウチのです！

荒木は心臓を抑える。

玄関よりイ・ヨンとキム・チャングム夫妻が登場。

荒木 どうかそんな大きな声をださないでください。私が言いたいのはあの土地は私のものだと  
いう事です。

マーシャ ゴーン。ゴーン。

荒木 なんですそれは？

マーシャ 阿呆らし屋の鐘だす。

荒木 化け物！！

荒木は下手から出てゆく。

荒木の大声に夫妻の抱いていた赤ん坊が泣きだす。

### シーン③ 宮沢学校

マーシャは苛立ちのあまりそこいらを蹴る。

夫妻はその様子を恐る恐る見ている。

マーシャ なんて品のない、あんな人とは、……（家族に気がつき）あら？

ヨン はい。

マーシャ 李（リ）さんですか？

ヨン はいイです。

ヨンは紙を差し出す。

マーシャ どうもすんまへん。びっくりなさったでしょ。私塩川マリアです。

ヨン 塩川。

マーシャ マリア。マーシャ呼ばれています。

ヨン 塩川。マーシャ。はいはい。(チャングムに) チョムスニ デリゴ ナガ!(チョムスンを

外へ連れ出せ!)

チャングム クン ソリ ネジ マラヨ!(大声出さないで!)

チャングムは赤ん坊を抱いて外へ。

マーシャ すんまへん。今父がおりませんよって少しだけまっていただけますか?

ヨン (頭を下げ) イ・ヨンです。

マーシャ (聞き返す) イ?

ヨン イです。

マーシャ (外にいるチャングムに向かって) どうぞ、おはいりください。

チャングムは赤ん坊をだいて部屋に。

ヨン チョムスニ ジョオン ジョオンヒ シキョ!(チョムスンを泣きやませろ!)

チャングム グロニツカ クン ソリ ジョオン ネジ マアラグヨ!(だから大声をださない

でよ!)

マーシャ お疲れでしょ。(座らせる) ちょっと待ってくださいよ。

マーシャは奥に去る。

ヨン チュウツチ?(寒くはないか?)

チャングム スグイエヨ? (あの人は?)

ヨン シオガワ ッシ、(あれが塩川さんだよ)

チャングム イルボニン? (日本人?)

ヨン オ? (さあ?)

チャングム ヨギエソ イルハヌン ゴイエヨ? (ここで働くの?)

ヨン チョムスニ チュウツゲッタ (チョムスンが寒がってる。)

チャングムは子守唄を歌う。

♪ セヤ セヤ パランセヤ

(鳥よ鳥よ 青い鳥よ)

ノットウ バテ アンチ マラ

(緑豆の畑に 降りるなよ)

ノットウ ッコチ トロジミヨン

(緑豆花が 散れば)

チョンポ ジャンス ウルゴガンダ

(豆腐売り 泣いちゃうぞ)

そこに宮沢が登場。しばらく子守唄を聞いている。

赤ん坊が泣きやむ。チャングムは宮沢に気がつき、歌をやめる。

宮沢 あーどうも。

奥からお盆をもってマーシャ登場。お盆にはジュースが三つ。

マーシャ あら、



下手からもとこと源太が飛び込んでくる。

もとこ カウクラーニシズムジツル イツツウギジ <kaukrai ni sizndzitr it ykidz.> (嫌だ！)

わたし日本語なんか使いたくないもん！)

源太 ダメだ！ ちゃんと日本語を使いなさい。

もとこ ニユクン アンヴァラ シズムタ カウジ <nykyn anvara sizm ta kaudz.> (お兄ちゃんだつて日本人じゃないくせに)

源太は怒りのあまり座りこむ。

宮沢 あのーガバン忘れだみだいで、

マーシャ はいはい、先ほど父が、

宮沢 んだすか、

マーシャ どうぞこちらでお待ちください。

源太 ここは日本だ。日本に住む人はみんな日本人だ。日本人は日本の学校に行かなきゃいけな

い。(マーシャに) そうでしょ？

マーシャ セや、先生に教えてもらったら？

宮沢 は？

マーシャ よろしおすやん。父が来るまで、

塩川が帰ってくる。

塩川 なんやここにおったんかいな。

宮沢 申しわけながんす。

塩川は宮沢にカバンを渡す。

宮沢 ありがとがんす。(源太に) あのー、私のノートは、

宮沢は源太にノートを返すよう要求する。しかし源太は応じない。

マーシャ (イ一家をさし) お父ちゃん、

イ一家は直立する。

塩川 へ？

ヨン お前、塩川さん？

塩川 ああ、はいはい、遠いところ苦労はん。

ヨン はいイ・ヨンです。

塩川 ほな農場行く前に家の方案内しよかな、荷物はそれだけかいな？

ヨン はい、イ・ヨンです。(チャングムを紹介し) 妻と娘です。

塩川 ああ、さよか、荷物は？ それで全部？

ヨン 妻と娘です。

塩川 (日本語が通じないことを、マーシャに) 困ったな。

宮沢 いい加減にしてけろじゃ。

源太はノートをまるで人質のように上に掲げる。

源太 先生。お願いします。

塩川 あ！

マーシャ どないしたん？

塩川 おおおお前どどどどうなった？

マーシャ は？

塩川 結婚や！あの男、お前に結婚を申し込む、ちゅうて、

マーシャ 連れ戻してちょうだい！

塩川は荒木を探しにまた外へ。

マーシャはしばらくそこら辺を歩き回るがやがて奥に去る。

宮沢 お願いつて何だべ？

源太 この子に日本語を教えてやってください。

宮沢 は？

源太 それじゃ、また来ます。

宮沢 じゃじゃ！困るじゃ。明日は豊原さ戻らねばならねんだじゃ！

源太は下手より去る。

宮沢は呆然と立っている。

宮沢 ……空があんまり光ればかへつてがらんと暗くみえ 三羽の鳥が飛んでくる。

もどこ どこ？

宮沢 は？

もどこ 鳥。

宮沢 なぜお前はそんなにひとりばかりの妹を 悼んでいるかと遠いひとびとの表情が言ひ

またわたくしのなかでいふ Casual Observer! Superficial traveler! (『オホーツク挽歌』(「無

聲慟哭・オホーツク挽歌」宮沢賢治著／新潮文庫より)

宮沢は笑う。そして今までと別人のように明るくなる。

もところと夫妻はやや気味悪がる。

宮沢 んだ！ギリヤーク語教えてけろじゃ。

もところ ……。

宮沢 さきがた喋ってたでねえすか？

もところ 喋ってない。

宮沢 うそだ。喋ってらったじゃ。

宮沢はコップを手に取る。

宮沢 こいづは？

もところ ……誰？

宮沢 おらだべか？

もところ どこから来たの？

宮沢 イーハトーブ。

もところ ？？

宮沢 こごがらずつと南だべ、北海道よりもつと南だじゃい、

もところ 船！

宮沢 んだ。稚内がら船で大泊。それがら、

もところ 鉄道！

宮沢 んだ、樺太鉄道さも乗はったじゃ。大泊がら豊原、豊原から栄浜までなつす。

もところ どんなのだった？

宮沢 おめはんのえなさんに持つてがれたじゃい。

もところは宮沢が手にしたコップを取り、

もところ クルスク〈kursuk〉(コップ)

宮沢 (ニヴフ語をまねて) クルスク?

もところ うん。

宮沢は机を指差す。

もところ トウル〈tur〉(机)

宮沢 (ニヴフ語をまねて) トウル

宮沢は自分(わたし)を指差す。

もところ ニ〈ni〉(わたし)

宮沢とイ夫妻 (ニヴフ語をまねて) ニ。

宮沢 いや、これハ日本語でねーがら、

ヨン はい。がんばります。

宮沢は靴を指差す。

もところ キー〈ki〉(靴)

宮沢と朝鮮人夫妻 (ニヴフ語をまねて) キー。

もところ ニギー〈nighi〉(私の靴)

宮沢と朝鮮人夫妻 (ニヴフ語をまねて) ニギー。

皆は自分たちに拍手。

宮沢 あのなハこれは日本語でねえすからね。

イ はい。イです。(妻を紹介し) チャングム。(娘を紹介し) チョムスン。  
もどこ チョムスン？

イ はい。

もところは赤ん坊を抱きたがる。

母親はもどこにチョムスンを抱かせる。

イ夫妻は旅の緊張が解けたかのように、くつろぐ。

チャングム オイグ、ウリ チョムスンニ オンニ センギヨツネ(見て、  
チョムスンにお姉さん  
ができた)

宮沢 ああんだ。まつごど。チョムスンの姉(あね)さんだじゃ。

ヨンは故郷の歌を唄う。

皆は手拍子で答える。

シーン④ 申し込み再び

そこに玄関先から塩川登場。

塩川 (奥に) マーシャ！ マーシャ！

奥よりマーシャ登場。

マーシャ お父ちゃん！

塩川 連れてきたぞ。

荒木登場。彼は心臓が弱い。先ほどの口論で興奮しまだ朦朧としている。

マーシャ (もだえる) 先生!

塩川 (皆に) さあさあ帰った帰った。今日はおしまい、店じまいや。若い二人の邪魔する奴は

ロバのパン屋にひかれまっせ! さあ帰った帰った!

皆は塩川にせかされ外に出される。塩川も奥に去る。

マーシャ 嫌やわあ急に帰ってしまったわはるんやもん。ここ座つとくれやす。

荒木 声がするぞ?ここは祇園か?先斗町なのか?

マーシャ しっかりしとおくれやっしや、

荒木 あ、マーシャさん。いいですか、あの四本の楡の木は、もといこの島はもともと、

マーシャ ええ、日本のものです。ウチ、心からそう思いますんよ。樺太 I S J A P A N。

荒木 あああなたはなんて素晴らしい人だ。

マーシャ で、今日はどういったご用で来られましたの?

荒木 マーシャさん、

マーシャ はい。(と、プロポーズへの期待を高める)

荒木 (言おうとするが、話をそらし) 今日、どうも蒸しますな。

二人は仕切りのなおすように少し距離をとる。

マーシャ そうどすな。ところで、最近、狩りにはいつてますの?

荒木 ええ。近くエゾ山鳩を撃ちにまいます。そうそう、とんでもない災難にあいましてね。

あなたもご存じのウチのシンゾー丸が足を怪我しまして、

マーシャ ほう、なんで?

荒木 さあどこかの犬に咬まれたか、関節がはずれたか、残念無念です。実際素晴らしい犬ですからね。私はあのシンゾー丸を羊二頭と交換してやっと手に入れたんですから。

マーシヤ 羊二頭？ あのシンちゃんか？

荒木 それだけの値打ちがありますよ、実際彼ほど長く働いてくれたのは犬は他にいませんからね。

マーシヤ ウチのプーチン丸は羊二頭どころか、干し草ふた束でしたけど、お宅のシンゾー丸よりよっぽど働きませっせ。

荒木 あのプーチン丸が？うちのシンゾー丸より？何をバカな、

マーシヤ まあバカやなんて。ウチのプーチン丸はサハリンで一番の犬です！

荒木 ははは。アナタはよっぽどものを知らないんですな。いいですか、ウチのシンゾー丸は華麗なる獵犬一族なんですぞ、シンゾー丸の父親はかつてプリンスとあだ名されたシンタロウ丸。おじいちゃんは今や伝説、生きてる間は妖怪とよばれたノブスケ丸ですからね。これらの犬とは血筋が違います。

マーシヤ そらお血筋は立派かもしれませんが、犬はやっぱり仕事してなんぼだす。ウチのプーチン丸は血筋はさっぱりですけど、働く働く。ウチには他にエリツイン丸とゴルバチョフ丸というのがありましたけど、その二倍三倍は結果だしてま。

荒木 プーチン丸の噂は私も聞いておりますよ。みんな言ってます。プーチンはちょっと怖い。

マーシヤ 日本人は犬を可愛がりすぎなんですよ、ロシアにはこんな言葉があります。狩場で勇敢な犬こそ優秀な犬である。

荒木 それじゃウチのシンゾー丸が勇敢ではないと？

マーシヤ ええ。わがロシア犬にかかればあんな犬イチコロです！

荒木 あたまに来た！ 私は特定の支持団体はありませんけど、ここまでコケにされては日本の犬の沽券にかかわります。はつきり申し上げます。おたくのプーチン丸なんかよりウチのシンゾー丸ちゃんのほうがよっぽど優秀です！

マーシヤ プーチン丸です！

荒木 シンゾー丸です！



奥から塩川登場。

塩川 なんやなんや、大きい声だして。

マーシャ お父ちゃん聞いて、この人ったらウチのプーチン丸よりこちらのシンゾウちゃんのほうが優秀やなんて仰るのよ。

塩川 なに？

荒木 プーチン丸ももうぼちぼちお年なんじゃないですか、そろそろ引退した方が、

塩川 なんやとウチのプーチン丸が老いぼれやいうんか！

荒木 ふん！

塩川 それじゃ言わせてもらいまっけどな、シンゾー丸は内弁慶。家のなかで威張ってるだけや、ウチのプーチン丸だけやないで、お向さんのトランプ丸、向こうのキンペイ丸、この連中の前にでたら大人しすぎるやおまへんか、借りてきた猫ですわ。

荒木 私だって医者ですから、一応、日本医師会の会員です。これ以上のシンゾーへの悪口はゆるしませんよ！

マーシャ 悪口やおまへん。ウチら心配してますねん。

塩川 そうそう、シンゾー丸なんかで大丈夫なんですか？

マーシャ そやけどお父ちゃん、シンゾー丸より他がおらへんねん。

塩川 それはそれは難儀どすな。

荒木 なんて嫌な親子だ。なんて嫌な京都弁だ。

マーシャ おおきに。

荒木 ロシア人はみんなアル中だ！

マーシャ 日本人なんかみんなうすら笑いで集団行動で炭水化物が大好きだ！

荒木 離婚率ナンバーワン！マフィア経済！泥棒国家のうんこたれ！

塩川 藪医者！約束やぶり！

マーシャ 低能！無能！チンチクリンの甲斐性なし！

荒木 ああ頭がくらくらしてきた。これはいかんぞ、これはいかん！

荒木は倒れこむ。

塩川 へん！ ざまあ見ろ！

マーシヤは荒木の胸に手を当てる。

マーシヤ いや、死んでもた！お父ちゃん、どないしょ？

塩川 何？（胸に手をあてる）あれま、本当に死んでいる。おい水だ！ 水を持ってこい！

マーシヤは水を飲ませる。

荒木は生き返る。

荒木 ああ死ぬかと思った。

マーシヤ あなたびつくりさせちゃ嫌よ。わたし本当に驚いたのだから、

荒木 憶えていますか、あの四本の楡の木の下で、うちのシンゾウ丸とお宅のプーチン丸が戯れていましたね。その時は確信したのです。私たちはきつとうまくやっています。ロシ

アと日本。そんなの関係ありません。私はあなたを愛しています。

マーシヤ ウチも。ウチもです！

二人は熱いキス。

塩川 シャンパンだ！シャンパンを持ってこい！

イ一家、宮沢、もとこと源太も登場し、シャンパンがふるまわれる。

もとは源太から宮沢のノートを奪い、それを宮沢に返す。  
宮沢がノートを開くと、機関車の音が聞こえてくる。

「樺太鉄道」

やなぎらんやあかつめくさの群落

松脂岩薄片のけむりがただよひ

鈴谷山脈は光霧か雲かわからない

(灼かれた馴鹿の黒い頭骨は

線路のよこの赤砂利に

ごく敬虔に置かれている)

そつと見てごらんなさい

やなぎが青くしげつてふるへています

きつとポラリスやなぎですよ

おお満艦飾のこのえぞにふの花

月光いろのかんざしは

すなおほなコロボックルのです

(ナモザダルマプフンダリカサストラ)

Vant Hoffの雲の白髪の高さ

崖にならぶものは聖白樺(セントベチュラアルバ)

青びかりの野はらをよぎる細流

それはツンドラを截り

(光るのは電しんばしらの硝子)

夕日にすかし出されると

その緑金の草の葉に

ごく精緻ないちいちの葉脈

(樺の微動のうつくしさ)

黒い木柵も設けられて

やなぎらんの光の点綴

(こゝいらの樺の木は

焼けた野原から生えたので

みんな大乘風の考をもっている)

にせものの大乗居士どもをみんな灼け

太陽もすこし青ざめて

山脈の縮れた白い雲の上にかかり

列車の窓の稜のひととこが

プリズムになつて日光を反射し

草地になげられたスペクトル

(雲はさつきからゆつくり流れている)

日さえまもなくかくされる

かくされる前には感応により

かくされた后には威神力により

まばゆい白金環ができるのだ

(ナモサダルマプフンダリカサストラ)

たしかに日はいま羊毛の雲にはいらうとして

サガレンの八月のすきとほつた空気を

やうやく葡萄の果汁(マスト)のように

またフレツプスのやうに甘くはつかうさせるのだ

引用元 「無聲慟哭・オホーツク挽歌」宮沢賢治著／新潮文庫

字幕「1931年 満州事変」

字幕「1932年 満州国建設」

字幕「1933年 国際連盟を脱退」

字幕「1937年 蘆溝橋事件により中国と全面戦争開始」

字幕「1941年 日ソ中立条約締結」

字幕「1941年 太平洋戦争はじまる」

字幕「1943年 アッツ島の戦い日本軍全滅。初めて玉砕という言葉がつかわれる」

字幕「1944年 レイテ沖海戦で神風特別攻撃隊が初めて出撃する」

字幕「1945年3月 本土への空襲が激しさをます」

字幕「1945年4月 沖繩戦はじまる」

幕間劇① 国境地帯の兵士たち

舞台上に上村源太。兵隊姿。

「1945年8月5日」

源太 俺たちはいまソ連との国境からわずか四キロ離れたところにいる。国境地帯は見渡すかぎりの森で、目の前を東西に川がながれる。夏の夕方は濃い霧のせいで一寸先すら見えなくなる。昼間の強い日差しがツンドラを溶かし、水蒸気になって立ち上るのだ。そんななか遙か北の方からズーンズーンと大地を揺るがす音がする。戦争の足音だ。この霧の向こうに軍隊が隠れている。

「1945年8月6日」

源太 目の前に流れる川。その南側河川敷に塹壕をほり通路を張り巡らせる。対戦車砲と重機関銃を一つずつ据える。川にかかる橋を敵に使わせないために爆破した。

「1945年8月9日」

源太 ようやくソ連が戦争を宣言した。集合がかかる。「どんなに攻撃を受けようと我々はここを一步も退いてはならない」もとより承知。けれど周囲をみれば青ざめる者、慌てて便所に駆け込むものがある。笑止である。一日、霧の向うを睨みつける。しかし川向うの森に何の変化もない。

「1945年8月10日」

源太 今日敵の姿は見えない。南よりぞくぞくと味方が集まる。もとより勝利は願わず、一秒でも長く敵をここに釘付けにするのみ。応援にきた連中が俺の顔を見てヒソヒソ話をする。俺の目が青いのを見て露骨に驚く輩もいる。今に見てろ！

「1945年8月11日」

#### 一斉射撃の音

源太 一斉に森が動き始める。四両の戦車が森から姿を現し、バラバラと歩兵が散開する。正面突破だ。塹壕にちらばり応戦する。河川の段差に乗り上げた戦車を狙い撃ちするが、撃破するまでは至らない。敵歩兵が我が陣地に進入し肉弾戦が始まる。しばらくすると敵は正面突破をあきらめ、霧に紛れて迂回する作戦をとりはじめた。俺は和泉少尉と一緒に塹壕を抜け、迂回した敵の後につく。その時、俺ははっきり聞いた。

声「イズミショーイ」

源太 聞いたこともない声だった。和泉少尉は足を止めた。そして、

銃声

源太 和泉少尉は倒れた。俺は近くの茂みに身をふせた。しばらくすると倒れた少尉の傍に銃をもった兵隊があらわれた。日本兵とまったく同じ服をきて、日本人と同じ肌の色、同じ目の色をした兵隊が、血にまみれた少尉を見下ろしている。俺はわけがわからなくなって茂みから身を乗り出した。するとその兵隊は俺に銃を突きつけ、

声「……お前は、何人だ」

源太 俺は声が出なかった。そんな俺を見て、

声「お前は、ギリヤークか？」

声「森へ帰れ！」／声「パルドッホ ヴィアー〈paldoh vija〉」

源太 兵隊は霧の中に消えた。俺は森に向かって歩き始めた。

幕間①終り

幕間劇② ソ連軍、南へ

舞台上に荒木。すでに初老である。

「1945年8月13日」

荒木 前日の夕方から噂はひろがりはじめていた。いや、噂ではないかもしれない。最初は「いづれこの町にもソ連軍がやってくるだろう」という覚悟のような諦めのような気分が漂い始め、国境を突破したソ連軍の話聞き、わがもの顔で空を飛ぶソ連の戦闘機を見て「明日にもこの町にソ連軍がやってくる」と嘯きあい、終わりはあっけなく、幸せな記憶が真っ黒に塗りつぶされる前に。そんな思いから、私は朝、まだ夜もあけないうちに薬局にある青酸カリを手に取り、これはマーシャの分、これは娘たちの分、これは自分の分と、と取り分けておいた。それで何の仕事を果たしたわけでもないが、気持ちは落ち着き、また布団に戻って眠ってしまった。

起きた時にはもう8時を過ぎていた。私は町で結成された義勇戦闘隊に医師として参加するつもりだった。上の娘節子がやってきて、「私も義勇兵に参加する」という。馬鹿言うな。私は一喝した。樺太から北海道への引き揚げは樺太庁長官大津敏男の指揮のもとで始まっていた。すでに大泊や真岡は女子供でこった返しているという。私は節子に「命令がでしだいお前はお母さんと房子を連れて真岡に向かいなさい」と告げた。そしてマーシャにこっそり「いざとなったらこれを」と三人分の青酸カリを渡した。私は町に出た。義勇戦闘隊の面々はすでに集まっていた。皆、手にクワ、オノ、ツルハシを持っている。我々の任務は、北から南の港に向かう民間人を援護しつつ北に向かい、まだ戦線を持続している軍隊の指揮下に入り、ともに戦う事だ。私はそう思っていた。ところがその日、我々が向かう先は、内陸の炭鉱だと言う。聞けばある炭鉱で朝鮮人の集団にただならぬ動きがあるという噂があるそうだ。ここでも噂だ。正直に言おう。私たち家族も一刻も早く港に向かうべきではないか。なぜこんなところで……、その時、南から、日本の戦闘機がただ一機、まっすぐ北へ向かって飛んで行った。皆は歓声をあげる。日本はまだ健在だ。日本はまだまだ戦いをやめない。ひとまず例の炭鉱へ続く道へ出ようと、歩き始めた。すると半時もたたないうちに、町から人がやってきて「ソ連軍が上陸した」という。それも真岡の港ではなく、ここ野田の海岸にだという。誰かがその男の胸倉をつかみ「本当だな」と問い詰める。

「沖合に船が見えた。ソ連の船だ。そこからボートのような小舟にのってソ連軍が海岸に



上陸するのを見た者がいる」

私たちは一目散に町に戻った。思い切り戦おう。そんな気持ちになれた。ところが町に戻ると、街ゆく人は皆、落ち着いた表情でうつすら笑みさえ浮かべたものもいる。一人を捕まえて事情を聴くと、こともなげに「ソ連軍の上陸の話、あれは誤報でした」みなへなへなど膝から崩れ落ちた。ただ私だけが、喉から腹にかけて真っ黒な塊を飲み込んでしまったように、体が重くなる。家に帰らなくてはいけない。そしてマーシャが節子が房子が無事であることを確かめなくてはいけない。一人で歩き出した時、向こうから、「お父さん！」と節子の声。見れば義父と節子が見つつけ手をふっている。私は声をあげて、地に足つかず泳ぐようにそちらにかけよる。節子は私が出た後、一人で義父塩川の様子を見に行ったそうだ。そこでソ連上陸の話聞き、死を覚悟したが、それが嘘だったと知って、いま家に戻る途中だという。

「それで母さんは？」

「きつとお家だと思うわ」

これがマーシャの分、これが娘たちの分……、暗黒が私の身体をすっぽり包んだ。

#### 幕間②終り

#### 幕間劇③ 真岡の朝鮮人たち

舞台上にチョムスン。すでに成人し、妊婦姿である。

「1945年8月15日」

チョムスン その日、大事な放送があると聞かされていた私たちは、真岡郵便局のそばに集められた。そこには机に置かれたラジオがまるで仏壇みたいに私たちの前にあり、帽子をとったお偉いさんたちがひっきりなしに汗をぬぐいながらチラチラ時計を見てる。そして正午きっかり、放送がはじまった。ラジオから遠く離れた場所にいた私にはただガーガーとい

う音しか聞こえなかった。「ただいまの放送にある通り、我々は最後の一人になるまで戦い抜こう！」。戸惑う気持ちのまま、坂をくだる。体は重い。妊娠のせいかわからないが、口の中が変にかわく。家で水を飲もう。一歩ずつ坂をくだる私の横を、物凄い顔をした軍人が一目散に駆け上がってゆく。家につくとすぐに後ろから「明子！」とあの人の声。家に入るなり「聞いたか？ラジオ」。よく聞こえなかったことを伝えると、

「クツナツソ、ジョンジェンイ」（終わったんだ。戦争が）

「イルボニ ペジヨヌル インジョンヘツソ！」（日本が負けを認めただ）

「マンセ！」

あの人は慌てて私の口を塞いだ。

そして「チョムスニ」と私の名を呼んだ。私も「サンス」とささやきかえす。

何度も小さな万歳を繰り返した。

「1945年8月20日」

チョムスン 朝。体が重い。隣であの人も寝ている。口の中があいかわらずネバネバして気持ち悪い。うがいをすべきだが起きたくない。もう少し寝ていることにした。「ドーン」隣にあの人がいない。「ドーン」、海の方からだ。時刻は朝の7時半。家の前の坂道を次々に人が駆け上ってゆく。「チョムスニ」とあの人の声。「何？ どうしたの？」「ソ連軍がやってくる」「でも戦争は終わったんでしょ」「早くお前も坂を上れ」「上ってどうするの？」「いいから海から離れるんだ」「でも戦争は終わったんでしょ」その言葉も終わらないうちに走り出そうとするあの人、「一緒に来て！」そう叫んだが、もう海の方へ下っていった。私は荷物をまとめる。まとめながら怒りがふつふつとこみ上がる。誰かがあの人のことを鳥だと言った。今はそれがよくわかる。鳥のようにあちこち飛び回る。不意に現れてはまたすぐにいなくなる。まったくその通りだ。

人の群れは坂を上って林道に向かう。だんだん道も険しくなる。振り返ると港にはソ連の軍艦。朝、大砲を撃ったのはあれだろう。黒いボートがいくつか港につながれている。町のあちこちから煙があがる。銃を連射する音に混じって手榴弾の音。それに比べて人の

声は聞こえてこない。私たちは林道を歩く。戦争は終わったはずなのに、道は次第に熊笹に覆われ、先頭をゆく軍人が銃剣でなぎ倒しながら進む。銃剣を振り上げるたびに剣先が後ろの女の人の頬すれすれをかすめ、見ていられない。このまま歩き続けどこまで行くのだろう。豊原だろうか？ でも豊原だって無事ではあるまい。「伏せろ！」降下した飛行機が鉄の雨を降らせ、また飛び去る。「明子さん！（チョムスンの日本名）」同じ職場の人が両脇に子供を抱えて近づく。「これはどこへ行くのですか？」「さあ豊原かもしれません」「豊原は無事なんですか？」「さあわかりません」私たちは顔を見合わせる。きっと私も同じような顔をしているのだろう。「伏せろ！」「またも鉄の雨。からかうように飛び去ってゆく。」「ここについて大丈夫かしら」「わかりません」「あの飛行機きつとまた戻ってくるわ」「そうね」「明子さん」「はい」「あなたちつとも怖がらないのね」

後ろから「ここは危ない。逃げろ」とあの人の声。私の手を取り熊笹の藪をかき分ける。

「どこ行ってたの？」「北部の炭鉱で朝鮮人が暴動を起こした」「は？」「日本人と一緒に逃げるな」「何言ってるの？」「ここにいろ。また来るから」「ダメ。ここに居なさい」「大丈夫。また来るから」

私は熊笹に座り込む。汗のにおいにアブが寄る。どうすることもできない。一秒、一秒、時間が過ぎるのを待つだけだ。やがて昼を過ぎた。町の方からは銃声はやんでたまに手榴弾の音が聞こえてくる。この藪のなかに何組かの家族がじつと息をひそめている。その息遣いが聞こえてくる。もし私が朝鮮人だとわかったら。こんな所で死ぬわけにはいかない。やがて夜が来た。周りの藪でも、おそろおそろ藪を抜け、町の様子を伺い始めた。手榴弾の音もしない。戦闘は終わったのかしら。私は、坂を下り、街に戻った。ソ連軍はどこにいない。きつと船にもどるか、占領した建物に集まっているのだろう。私は家に戻った。あの人はいない。職場にも行ってみた。いない。探すから居ないんだ。探さなければ向こうからやってくる。もう一度家に戻ろうとしたとき、家のそばに人影。私を見て声をあげた。

「チョムスナ」。

父だった。

幕間劇④ 新たな人々

舞台上に移民たちの姿。瓦礫の街にやってきたばかり。

朗読

この頃、樺太には40万人が住んでいた。そのうち10万人が終戦の混乱のなか本土に引き上げていった。そして彼らと入れ替わるように、サハリンの港町についた船から奇妙な集団が次々に降りてきた。それは遠く東ヨーロッパから、ナチスドイツによって故郷を失った人々だったり、もう20年以上前の日本による韓国併合、それを嫌って朝鮮から北へ北へと逃げた朝鮮人たちもいた。彼らはここサハリンに新世界を作り上げるために送り込まれた人々だった。彼らはみな貧しい身なりで、持ち物と言えば木製のトランクか馬鹿でかいズダ袋だ。安っぽいスカート、素足のまま靴を履いているものもいた。新聞紙をちぎってはタバコを丸め、ガサガサに荒れた手にそれを挟んではしきりに煙を吐き出す。あらゆる暴力に痛めつけられてきた彼らに、今度はサハリンの開発が託されたのだ。

字幕「1945年8月27日 サハリンにソ連軍政府が設立される」

幕間劇④終り

第三幕

◇登場人物

大島もとこ（旧姓上村もとこ）

大島孝則（もとこの息子）

荒木節子（荒木とマーシャの長女）

荒木（保健局に勤める医師）

チヨムスン（ヨンの娘）

イ・ヨン（チヨムスンの父）

アンドレイ（保健局に勤める通訳）

女（北海道への密航を願う日本人）

役人①（保健局局長）

◇三幕のあらすじ

第二次大戦によりソ連の実効支配下におかれたサハリンでは、多くの人々が故郷に帰ることを夢見ていた。医師荒木は娘の節子と共に、人々の願いをかなえるため秘密の仕事に励んでいる。敗戦の冬、塩川正十郎の葬儀に人々が集う。かつて塩川農園でクリームソーダを飲んでいたものは、息子孝則と共に。農園で働いていた朝鮮人イ・ヨンとその娘チヨムスは、敗戦後の混乱のなか産まれた赤ん坊を抱いて。また葬儀にはソ連の役人もやって来る。これからの生活に不安を抱えつつも、再会を楽しむ人々。けれど突然の知らせが、荒木一家の生活を暗転させる。

シーン①吹雪の再会

字幕「1945年12月某日」

一幕でポチヨムキン家の居間だったこの部屋は、二幕で塩川農場のエントランスになり、三幕ではソ連軍政府（以下当局と記す）の指令により町の公共食堂になっている。

とは言え塩川正十郎、医師荒木、荒木の娘節子はこの家に住んでいる。

下手が店の入り口。上手は厨房につながる（奥とも呼ばれる）。テーブルが二つ。

椅子が三つずつ。

塩川正十郎の孫娘であり、医師荒木の娘である荒木節子が一人物思いにふけっている。

外は吹雪。

来客をしらせる鐘。つづいてもとことその息子大島孝則が登場。

もところは、十年ほど前に日本人鉄道技師と結婚。今は大島姓になっている。

もところ ああ、

節子 (ようやく気が付き) あ、すみません。今日はちょっと、

もところ せつちゃん？

二人は互いの顔を見て、

節子 もー姉ちゃん??

二人は抱き合って喜ぶ。

もところ よかった。無事だったのね。

節子 もー姉ちゃんこそ。今はどこ住んではるの？

もところ 豊原、

節子 旦那さんは？

もところ 無事よ。今は豊原で鉄道の仕事してる。

節子 鉄道？でも旦那さんって製紙会社の、

もところ そう。製紙会社の経理だったんだけど。鉄道が先だって。でも本人は経理よりこっちの  
方が向いてるかもだって、

節子 憶えてるわ。

もところ 何を？

節子 結婚式。

もところ 私は忘れた。

節子　なんで？うちごつつ感動した。

もとこ　どこが？

節子　（以下を朗誦する）「まあ仮に、この島の2千の人口―それはもちろん、どうしようもな

い連中ばかりですが―」

もとこ　え？　憶えてるの？

節子　「そのなかに、教養ある人物は私たちだけだとして。言うまでもなく、」

退屈をしていた孝則に節子が気づく。

節子　……もしかして、

孝則　大島孝則です。

節子　え？あの、写真の？

もとこ　そう。あの子。

節子　大きくなって、

もとこ　（孝則に）こちら荒木節子さん。お母さんがずっとお世話になった、

節子　逆やん。ウチ、もー姉ちゃんに育てられたんやもん。

もとこ　そんなこと言ったらマーシャさんに怒られるわ。

節子　……。それなんですけど。

もとこ　もしかして、

節子　……。

もとこ　言わなくていいから、ね。

節子　……。そちらも大変やったんちゃいますか？

もとこ　そらもう。

節子　皆さんご無事でっか？

もとこ　うちはお兄ちゃんが、

節子　源太さん、

もところ 戦場に行ったきり。

節子 そう。

もところ 私たち家族は、主人の会社から南に逃げるように言われてね。それで大泊まで行ったんだけど、やっぱり北海道には渡れなくてね。ずっと足止め。でも秋から豊原で今の仕事について。

孝則 ユジノサハリンスク。

節子 は？

孝則 名前。かわる。豊原、

節子 ユジ、

孝則 ユジノサハリンスク。

もところ まだ正式じゃないけど、樺太の町の名前、かわるそうよ、

孝則 樺太、かわる、サハリン、

もところ・節子 ……。

節子 新聞見て来てくれたんでっか、

もところ ええ。塩川正十郎。名前みてびっくりした。まだ80歳だったのね。

節子 ええ。

もところ もう百歳くらいかと思った。

節子 ほんまやね。

もところ ちよつとご挨拶させてくれる？

節子 あ、どうぞ。

もところ 孝則は節子に案内されて奥へ。

そこに下手から女がやってくる。

女 すみませーん。



しかし奥からは誰もこない。

女 すみませーん。

節子登場。

節子 はい。

女 あ、

節子 えっと、どっちですよ、

女 は？

節子 塩川正十郎の葬式でっか？ それか食堂か、

女 あ、

節子 すんません。今日は食堂休みにさせてもらってるんです。

女 荒木先生の、娘さん？

節子 はい。

女 (節子にしがみつき) お願いします。

節子 落ち着いてください。

女 荒木先生にお願いすればどうにかなると、聞いたものですから、

節子 落ち着いて、静かに、

女 (懐から時計をだし)ひとまずこれを。後日必ずお届けしますので、

節子 要りません！

女 でも、ここに来いっていわれたんです、

節子 そういうことやないんです。父はそういう気持ちでやってるわけちゃうんです。

奥からもとこと孝則登場。

節子 明日は、お店あけますんで、

女はもところを警戒しながら、

女 では、また明日伺います。

節子 はい。

女は下手に去る。

節子 まだ四ヶ月しか経ってへんのに、

もところ ええ？

節子 えらい昔のことみたいや。

もところ ……ほんとにね。

入り口からチョムスンと父ヨン登場。

チョムスンは赤ん坊を抱いている。ヨンは風呂敷を抱えている。

チョムスンは幕間劇③の後、無事女の子を出産。今は父ヨンと共に、野田町に暮らしている。

もところ チョムスン！

もところ チョムスンは駆け寄りお互いの無事を喜ぶ。

もところ 真岡って聞いたものだから、

チョムスン もー姉ちゃんこそ、旦那さんの会社、北の方でしょ、

もところ でも、早いうちに南に逃げるように言われてね、

チョムスン そう。

もところ 今は豊原。

孝則 ユジノサハリンスク。

チヨムスン あ、

もところ 息子の孝則です。

チヨムスン あ、木下明子です。(チヨムスンの日本名)

もところ イ・チヨムスンさんよ。

孝則は頭をさげる。

もところ いつぶりかしら、

チヨムスン 結婚式、もー姉ちゃんの、

節子 (チヨムスンに) 憶えてる？ 結婚式でもー姉ちゃんのお父さん、

チヨムスン 憶えてる。

節子 「まあ仮に」

チヨムスン え？ セっちゃん暗記してるの？

節子 だってウチなんや知らん感動してしても、あとでエゴールさんに教えてもらった。

もところ 変な人だった。

節子 ウチ大好きやった。

眠っていた赤ん坊がぐずりだす。

もところ いくつ？

チヨムスン 三ヶ月。

もところ じゃ、

チヨムスン そう。九月生まれ。

もところ 抱かせて、

チヨムスン (赤ん坊に) ほら、もー姉ちゃんよ、

チヨムスは赤ん坊をもとこに。

もとこ 女の子？

チヨムスン そう。

ヨン 同じだ。

節子 え？

ヨン 二十二年前。ワシらが初めて樺太に来た時、同じようにチヨムスを抱いて。

もとこは子守唄を歌う。

♪ セヤ セヤ パランセヤ

(鳥よ鳥よ 青い鳥よ)

ノットウ バテ アンチ マラ

(緑豆の畑に 降りるなよ)

ノットウ ツコチ トロジミヨン

(緑豆花が 散れば)

チヨンポ ジャンス ウルゴガンダ

(豆腐売り 泣いちゃうぞ)

ヨン 荒木先生は？

節子 いままだ仕事で、

ヨン 保健局の？

節子 ええ。まだまだ人手不足みたいで、

ヨン でも、自分の義父のお葬式くらい、

節子 すんまへん。

ヨン いや、ご苦労様です。

もとの子守唄が終わる。

赤ん坊はすっかり泣き止んだ。

もどこ 名前は？

チヨムスン ミジャ。

父 じゃ、ご挨拶だけ。

節子 どうぞ。

ヨンとチヨムスンと節子は奥に去る。

もどこ (赤ん坊を抱きながら天井に向かって) さあよくご覧。精霊たちよ。これは赤ん坊じゃ

ないよ。これはゴミだよ。

孝則 お母さん、

もどこ これはゴミだよ。汚い汚いゴミだよ。

孝則 やめろつて。

もどこ アンタが生まれた時はね。誰もしてくれる人がいなかったから、わたし自分でしたのよ。

産んだばっかりで、ゴミ箱さがしてね。

孝則 ゴミ箱??

もどこ そう。本当は焚火の灰をすくうシャベルに乗せるのが一番いいんだけど、その時はゴミ

箱しかなかったの。

孝則 俺、生まれた途端、ゴミ箱入ったの？

もどこ そう。ゴミ箱入れて「これは赤ん坊じゃないよ、ゴミだよ」って言ってたら、向こうの

お母さんに見つかってね。ものすごく怒られた。

孝則 当たり前。

もところ あ頃はまだ喋れたのになあ。

孝則 何を？

もところ (天井に向かって) これは赤ん坊じゃないよ、ゴミだよ。

そこに節子が戻ってくる。儀式を目撃して、

節子 え？

もところ あ。精霊のね、目をくらませたの。

節子 精霊？

もところ 悪い精霊もいるから、

節子 精霊。

もところ チョムスンとはよく会ってるの？

節子 (否定の意味で) うんうん。あんまり。あの子結婚して真岡でしょ。戦争終わってこっち戻ってきて、それからかな、また会いだしたの、

もところ そう。じゃ、お産も、

節子 うん。こっち。

もところ 旦那さんは？

節子 (首を横にふる)

もところ 行方不明？

節子 (首を横にふる)

もところ (話題を無理に変えて) せっちゃんにもしてあげたんよ。

節子 何を？

もところ さっきのおまじない。チョムスンにも、ふさちゃんにも、

孝則 すみません。

節子 ありがとう。

もところ そうか……（と赤ん坊を見る）

節子 わからへんねんて、

もところ 何が？

節子 旦那さん。ソ連軍に殺されたか、日本人に殺されたか、

荒木が下手から登場。

外は吹雪いてきたようだ。

荒木 ただいま。

節子 お帰り。

もところ お久しぶりです。

荒木 もところちゃん？

もところ はい。

荒木 変わってないねー。

もところ はい。

荒木 うん。変わってない。

もところ 先生もお元気そうで、

荒木 今日はわざわざありがとうございます。

もところ いえ、塩川のオジサンにはお世話になりましたから、

荒木 そうだね。よくここで日本語の勉強してた。

もところ マーシャさんにお茶いれてもらって、

荒木 そうそう。こちらは、

孝則 大島孝則です。

荒木 大島？

節子 もー姉ちゃんの、

荒木 あ、そうか、今は大島か、

節子 結婚式出たでしょ、

荒木 息子さん？

孝則 はい。

荒木 (もとこが抱く赤ん坊を指し) 下の子？

もとこ あ、この子は、

節子 チョムスンが来てるの、

荒木 ああ、

孝則 保健局にお務めですか？

荒木 そう。お陰でこっちがくたばりそうだけだね。今も職場を抜けてきたんだ。俺は父親の葬式にでるんだってね。

節子 ソ連ってもうちちょっと労働者に優しい国や思ってた、

荒木 労働者には優しいさ。捕虜と囚人に厳しいだけだね。

孝則 どういう意味ですか、それ、

荒木 え？

もとこ (制するように) 孝則。

ヨンとチョムスンが戻ってくる。

ヨン 先生。

荒木 やあ、百川さん(ヨンの日本名)。お久しぶり。あ、イさんと呼んだ方がいいかな？

ヨン はい。イでお願いします。

荒木 今日はありがとう。

ヨン お悔み申し上げます。

荒木 どうも。

ヨン すごく安らかな顔でした。

荒木 ええ。



ヨン あの、マーシャさんと下のお子さんは？

荒木 房子ですか。

ヨン そうそう。房子ちゃん。

荒木 妻とあれは先に本土に帰らせました。

ヨン そうだったんですか。

荒木 ええ。この話をするとき苦しいのですが、ソ連が来るってわかった時にすぐに二人だけ大泊の港に向かわせましてね。そこから私の故郷に帰らせました。

ヨン そうでしたか、

荒木 なんとというか、申し訳ない。

ヨン いえいえ。喜ばしいことじゃないですか。でもどうして節子さんだけ、

荒木 まあ義父の世話もありましたし、本人も残りたいと言ったものですから、

ヨン へー。

節子 (困ったように) まあ、

チヨムスン アボジ。これ(と、父が持ってきた風呂敷を示す)

ヨン わかってるよ。(風呂敷を広げながら) 私たち家族が樺太に来たのは今から二十二年も前で  
す。塩川さん、荒木さん、エゴール食品さん、他にもいっぱいお世話になりました。

風呂敷包みの中は一升瓶。なかみはマッコリ。

ヨン つまらないものではありませんので、どうぞお召し上がりください。

皆は喜ぶ。

節子は奥につまみになるものを取りに行く。

もところはそれを手伝う。

荒木と孝則はテーブルと椅子を並べなおす。

シーン② 大津敏男について

朗読 1945年8月から同じ年の12月まで南サハリンには「役所」が二つあった。一つはソ連がつくった役所。だが戦場にもなったサハリン島を治めるのは大変で、あきらかに準備不足だった。そこで日本時代の役所をそのまま残すことにした。これがもう一つの役所。トップには旧樺太庁長官大津敏男がそのまま据えられた。しかしこの二つの役所は、立場はもちろんソ連が上で、大津はソ連がつくった命令書にハンコを押して、サハリンに暮らす30万の日本人たちにそれを伝達するだけの役割に過ぎなかった。そして秋が過ぎ、冬になり、ソ連による統治も次第に整い始め、大津らの役割も終わろうとしていた。

シーン③ 故郷

テーブルは宴会風に整えられる。

皆の手にはマッコリ。黒パン。キムチ。チーズなど。

ヨン 私の故郷は朝鮮の南にある小さな村です。秋にはお米がいっぱいとれます。木の実もとれます。野菜もとれます。海辺の村から魚もたくさん売りにきます。私大好きな故郷です。私の村には長い坂道がありました。そこにはこんな言い伝えがありました。この坂で転んだものは三年しか生きられない。だから村人はここで絶対ころばないように、慎重に慎重に歩きました。ですがある時、あるおじいさんがここで転んでしまった。おじいさんはワシの寿命もあと3年だーって怖くて怖くて泣いてしまった。ですが、そこに利口な少年がやってきて、もう一度転べといいます。どうしておじいさんは聞きます。一回転べば三年で、二回転べば六年。三回転べば九年だ。四回転べば十二年！

少年孝則の除き、皆は笑う。

孝則 荒木さん。

荒木 うん？

孝則 私たち、いつ日本に帰れますか？

皆が黙り込む。

荒木 さあいつだろうね。

節子 日本はいまどうなってるの？

孝則 さあ。

チヨムスン 爆弾が落とされたんでしょ、

孝則 広島と長崎です。

節子 二つだけ？

孝則 二つだけとは何です。新型爆弾ですよ、一つで何万人も死ぬんですよ。

節子 でも、日本中の町に爆弾落とされたって、

孝則 それは普通の爆弾です。普通って言っても、普通じゃありませんよ。普通じゃない爆弾が何万発も落ちてくるんです。

ヨン それじゃ逆かもしれませんね。

孝則 は？

ヨン 日本がそんなありさまじゃ、日本から樺太に引っ越してくるかもしれない。

孝則 樺太じゃありません。サハリンです！

チヨムスンの抱く赤ん坊がぐずり始める。

皆は声をひそめ、

孝則 もうじき引き揚げが始まると聞きました。

荒木 誰から？

孝則 だって新聞にも書いてあるじゃありませんか、もうじき大津さんたちの役目も終わるって、  
荒木 でもそれは日本時代の役所の役割が終わるってだけで、引き上げとは関係ないよ、

孝則 じゃ次は何をするんです？

荒木 ……。

孝則 ソ連がサハリンを治めるためのお手伝いをした。それで？次は？

荒木 君は新聞記者になれるよ。

孝則 ごまかさないでください。

もところ もう寝がえりはうつの？

チヨムスン まだ。この子頭が大きいの。

もところ おっぱいじゃない？

チヨムスン うん。

節子 じゃ、あっちで。

チヨムスン ありがとう。

チヨムスン二は赤ん坊を抱いて奥にさる。

荒木 (孝則に) 君は日本に帰りたいのかね？

孝則 もちろんです。

荒木 どうして？

孝則 どうしてって、だって、日本人ですから、

荒木 でも君は、この島の生まれだろ、

孝則 父は本土の生まれです。

ヨン 本土のどこですか？

孝則 いわきです。

ヨン 知ってます。いわき知ってます。

孝則 先生は帰りたくないのですか？

荒木 ……。

ヨン いわき、私の仲間いっぱいいます。みんな元気。きっと元気です。私の国、朝鮮です。私も帰ります。朝鮮に帰ります。チヨムスン、可哀そう。でも故郷は優しい。チヨムスン若い。きっときつと大丈夫。

荒木 私は、帰れない。

もところ どうしてですか？

荒木 ……。

ヨン 荒木先生。日本でもうひとふんばり。がんばりましょ。

もところ そう。マーシャさんもふさちゃんも待ってますよ。

荒木 ……ありがとう。

もところ チヨムスンのご主人のこと、お悔み申し上げます。

ヨン はい。

もところ 真岡はずいぶんひどかったみたいで。

ヨン はい。真岡は本当に可哀そうです。

孝則 先生、私たちはいつ日本に帰れますか？

荒木 私に聞かれても、

孝則 でも先生はソ連の偉い人たちと一緒に仕事してるんでしょ、

荒木 そういう話はしないよ、

孝則 まったくしないんですか？

荒木 まったくしないよ。

孝則 嘘だ。

もところ 孝則！

ヨン 国と国が決めることです。日本とソ連が話し合わなきゃ私たちは帰れません。でも今日の本はソ連と話し合う資格がない。これじゃ帰れません。

孝則 わかっていますよ。

荒木 だから、あともうしばらくはかかるだろうね。

ヨン さ、呑みましょう！

入り口付近にロシア人通訳アンドレイがいる。

アンドレイ 荒木さん。

もところとヨンと孝則は慌てて立ち上がる。

もところ (荒木に) 先生。

荒木 (アンドレイに気づき) アンドレイくん。

アンドレイ 来てしまいましたか。

荒木 そのようですね。でも嬉しいですよ。義父も喜びます。ありがとう。

アンドレイ いえいえどうもです。

奥より節子登場。

荒木 紹介します。保健局で一緒に働いているアンドレイくんです。

アンドレイ はじめまして。

皆は頭をさげる。

荒木 こちらイさん。私の古い友人です。こちらは大島もとこさん。

アンドレイ アナタ……、

もところ 父がロシア人なんです。

アンドレイ そうですか。

荒木 こちらがその息子さん、孝則くん。

孝則 大島孝則です。

孝則はアンドレイに握手をもとめる。

荒木 そしてこれが私の娘、節子です。

節子 荒木節子です。

荒木 この子の祖母がロシア人だね。だからこの子にもロシアの血が流れています。

アンドレイ いつも荒木先生にはお世話になっていますか。

節子 ……こちらこそ、父がいつもお世話になっています、……か、

アンドレイ いえ、それほどでも。

荒木 アンドレイくんは日本語の通訳をしていてね。保健局がそれなりに仕事になっているのも、彼のお陰なんだ。

アンドレイ いえ、それほどでも。荒木先生、たくさん働くすごく偉い。でも今日は先に帰った。

不可解。理由を言ってくれないから。

荒木 それはすまない。

アンドレイ それはお父さん死んだから。それ聞いてわたしびっくりしましたか、

荒木 びっくりしただろうね。

アンドレイ どれほどびっくりしましたか、

荒木 とてもびっくりしただろうね。

アンドレイ 臭い水。

荒木 みずくさい。

アンドレイ でも私は、日本のお葬式知りません。何する、言ってください。

荒木 じゃ先に顔だけ見てもらおうかな、

アンドレイ 行くべし。行くべし。

荒木とアンドレイは奥に去る。

しばらくしてアンドレイの騒ぐ声。

彼は慌てて飛び出してくる。その直後に荒木も出てくる。

アンドレイ 見てません。私は見てませんよ。

荒木 アンドレイくん。落ち着いて。

節子 どないしはったん？

授乳中だったチョムスンも登場。

アンドレイ ああダメです。私は見てません。

どうやらアンドレイは授乳中のチョムスンを見て驚いたようだ。

皆はそれを察し笑う。

アンドレイ なぜ笑いますか。

皆の笑いはぴたりとやむ。

荒木 こちらイさんの娘さん、チョムスンさんだ。

アンドレイ ……どうも。

荒木 さ、行こうか。

アンドレイと荒木は再び奥にさる。

チョムスン 誰？

もところ 保健局の人だって、



孝則 偉い人かな？

もところ 知らないわよ。

ヨン どうだろう。

節子 父の同僚みたいで。お通夜に来てくれはったんです。

チヨムスン 髪の毛が黒かった。

もところ そうね。

孝則 スターリンも黒い。

もところ そうなの？

孝則 あの人はアジア人だからね。

ヨン 誰が？

孝則 スターリン。

もところ うそ。

節子 (チヨムスンに) だっこ、いい？

チヨムスンは節子に赤ん坊を渡す。

ヨン 偉くなるかもしれないな(と黒パンにキムチを乗せて)

孝則 どうして？

ヨン だって日本語ができる。(と黒パンにキムチ乗せを食べる) うまい。

孝則 嘘。

ヨン やってごらん。

孝則 いい。

ヨン キムチは嫌いかい？

孝則 好きだよ。黒パンも好き。でも一緒には食べない。僕はチーズでいいや。

孝則はチーズにパンを乗せる。

ヨン 何してるの？

孝則 乗せてるの。

ヨン チーズの上に、パンを？

孝則 だって、味は舌で味わうんだよ。パンにチーズを乗せたらチーズが上にきちゃうじゃない。

上あごじゃ味わえない。(と食べる)

ヨン なるほど。

孝則はマッコリの瓶に手をのばす。

もところら！

孝則 いいじゃん。

もところらダメよ。

しかし孝則はマッコリをついでしまい。

もところら 孝則、やめなさい。

孝則はマッコリを飲む。

もところら！

アンドレイが奥から戻ってくる。

アンドレイ ここにチェーホフが来たのですか？

節子 は？

アンドレイ　いま荒木先生から聞きました。ここにチェーホフが来たのですか？

遅れて荒木も来る。

荒木　いやお義父さんの思い出話をしていてね。それでチェーホフのこと話したら、チェーホフが大好きみたいで。

アンドレイ　チェーホフはサハリン島に来ました。ですがこの町にきた記録はない。もしほんとなら大ニユースです。

節子　私の祖母の話ですけど。まだ祖父と結婚する前に、この家でパーティしたんですって、そこにチェーホフが来たって。

アンドレイ　わお。チェーホフはどんな人でした？

節子　いえ、私も直接聞いたわけじゃないんです。祖母も私が生まれる前に死んでますから、荒木　まあ、座ろう。

荒木はアンドレイに椅子を進める。

荒木　（アンドレイにマッコリをつぎながら）これはイさんが持ってきてくれたんだよ。

アンドレイ　ああ朝鮮の、

ヨン　呑んだことありますか？

アンドレイ　もちろんです。スパシーバ。

荒木　孝則くんは飲まないのかい？

孝則　いただきます。

荒木は孝則につぐ。

荒木　じゃ、塩川正十郎に、献杯。

皆は飲む。

荒木 そのチェーホフの話だね。日本でもチェーホフの芝居は人気があるんだよ。

アンドレイ ほんとか？

荒木 「桜の園」「三人姉妹」「かもめ」……あと何だっけ？

節子 知らない。

荒木 まあ樺太では見れなかったけどね、私の学生時代、東京の劇場ではしょっちゅうやってた。

それで一つおかしなことがあってね。このもとこさんのお父さんもロシア人で、そのチェーホフが来たらしいパーティーのこと知ってるんだ。

もとこ はい。

荒木 エゴールさんって言うんだけどね。その人がもとこちゃんの結婚式の時、立派なスピーチをしてね。それがどうもチェーホフのセリフみたいなんだ。

アンドレイ どんな？

節子 「まあ仮に、この島の二千の人口―それはもちろん、どうしようもない連中ばかりですが―そのなかに、教養ある人物は私たちだけだとします。言うまでもなく、私たちは、周囲の無知もうまいな大衆にうち勝つなどということとは、とてもできません。一生のうちに、私たちが段々譲歩しなければならなくなって、やがての群集のなかに紛れ込み、私たちの声も現実の雑音でかき消されてしまう。だからと言って、私たちはむなしく消え去るのではない。なんの影響も残さずに終わるわけではない。私たちの後に、私たちのような人が、こんどは六人でてくるかもしれません。それから十二人、それからまた……というように殖えていって、ついには私たちのような人が、大多数をしめることになるでしょう。二百年後、三百年後の生活は、想像もおよばぬほど素晴らしい、驚くべきものになるでしょう。」

アンドレイ ハラシヨ。お見事ですか。

荒木 いかにもチェーホフのセリフでしょ、

アンドレイ あなたのお父さんはどんな人でした？

もところ 父は、サハリンに流されてきた囚人でした。移住囚って言うんですか、牢屋に入れられるんじゃないくて、家を与えられて、そこらへん自由に歩き回れる身分だったそうです。それで母、私の母はギリヤーク人でした。母と一緒にあって、日本時代は二人でお店をしていました。

アンドレイ チェーホフは好きだったか？

もところ いえ。たぶんお芝居なんか人生で一度も観たことないと思います。ただ、このスピーチについては、ロシア時代の友達が言っていたことみたいで、

アンドレイ 友達？

もところ 何度も言うもんだから憶えてしまったと、

アンドレイ どんな友達、か？

もところ そこまでは、

アンドレイ ……。あなた（節子）はどうして憶えたんです。

節子 ウチは……、感動してしても、

アンドレイ 何に？

節子 さあ……。

アンドレイ これは「三人姉妹」です。確かにここだけ見ると立派なセリフですね。しかし私は「三人姉妹」を劇場で見たことがあります、とても不愉快なセリフでした。

もところ 不愉快？

アンドレイ ええ。「三人姉妹」にはヴェルシーニンという軍人が登場します。彼は立派な演説、先ほどアナタが仰ったような演説をするのですが、誰も聞きちゃいない。彼の理想に満ちたセリフは、誰にも聞いてもらえないんです。聞いてもらえない様子を、私たちは客席から見るのです。

もところ なんで？

アンドレイ 「なんで」？とは？

もところ なんでそんなことするの？

荒木 それがチエーホフの狙いなんですよ。

もとこ ……なんで？

荒木 つまりチエーホフは不完全な人間が、完成された社会などつくれるはずがないと訴えたか  
つたのかもしれない。

もとこ なんで？なんでそんなこと訴えたいの？

孝則 お母さん、

アンドレイ でも安心してください。たとえ人間が不完全であろうと正しい思想があればよいの  
です。正しい思想にもとづく正しい理論、それによる正しい指導に従えば、完成された社  
会をつくることはできます。チエーホフも感じていたはずですよ。これからは働く人々の時  
代が来ると。誠意ある労働者がどんどん増えて、そして団結すれば、想像もおよばぬ素晴  
らしい世界がくる。しかもそれは何百年も先の話ではありません。もうすぐそこまで来て  
いるのです！

孝則は立ち上がり、熱烈な拍手。

皆も立ち上がり拍手。

ヨンのみは拍手もしない。立ちもしない。

下手入り口付近に役人①登場。

役人① あの……、

皆は役人①に気づき、

アンドレイ 失礼。

アンドレイは席をたち、役人①のそばに。

端で二人はひそひそ話。

ヨン (声をひそめて) しばらくは帰れませんね。

荒木 かもしれませんね。

節子 どうして？

ヨン だから、その想像もおよばぬ素晴らしい世界をつくるために、働かされるんですよ。

チヨムスニ 一緒よ。

ヨン 何が？

チヨムスニ どこに住んでようと、働かなくちゃ。

荒木 そう、かもしれないな。

孝則 僕は働きますよ。サハリンで沢山働いて、正しい思想をこの身にしみこませるんです。それが何よりの学習じゃありませんか。いつか日本に帰ったら、今度は日本のために働きます。それで日本もソ連と同じくらい素晴らしい国にしてみせます！

アンドレイが席に戻ってくる。

荒木 どうしましたか？

アンドレイ たったいまユジノサハリンスクで大津敏男が逮捕された。

皆 は？

荒木 (立ち上がり) 罪名は？

アンドレイ ソビエトに対する破壊活動です。

荒木 もっと具体的にいいたまえ！

アンドレイ 大津は、ひそかに、北海道に逃がしていたそうです。日本人たちを。その中には大  
事な技術者も含まれていたようです。

荒木 ……。

アンドレイ かなり組織的な犯行です。逮捕者はまだ増えるかもしれません。

孝則 大津さんはどうなるんです？

アンドレイ もちろん裁判です。裁判で決めることです。

荒木はがっくり椅子に座り込む。

三幕終わり

幕間③

字幕「1946年 米ソ引き上げ協定により日本人の引き上げがはじまる」

字幕「1950年 朝鮮戦争はじまる」

字幕「1956年日ソ国交回復」

字幕「1960年代より「サハリン墓参団」として旧住民がサハリンを訪れる」



## 第四幕 断章サハリン

### ◇登場人物

もところ

チョムスン

節子

ミジャ（チョムスンの娘。今は日本人と結婚し「西川美子」と名乗る）

上村源太

役人②（サハリン墓参団のソ連側世話人）

ミジャの娘

ミジャの息子

ミジャの夫

節子の息子（医者のお卵）

### ◇四幕のあらすじ

冷戦下、宗谷岬とサハリンの間にも鉄のカーテンが降りている。しかし人々の交流は続く。「墓参団」が生まれ元住民の墓参りが行われた。チョムスンの娘ミジャも、祖父ヨンの骨を持って、1985年秋、野田町を訪れる。道中のミジャは何を見ても昔のことを思い出す。彼女はわずかに五歳でソ連支配下のサハリンから脱出したのだ。また出発前にミジャは、「もところ」のもとを訪れる。もところは故郷樺太を思いつつ、今は福島県いわき市に住んでいる。もところはミジャに産みの母チョムスンに会うことを強くすすめる。一方チエーホフ（旧野田町）では、節子がチョムスンにミジャの来訪を知らせるが、チョムスンは会うことを拒否する。二人の話はやがて荒木家の暗部に及ぶ。また幕間劇①で森に消えた上村源太の戦後の迷走も語られる。

散り散りになった人々の心に故郷への思いは沈殿し、発せられた言葉も風に舞い散る。

ミジャは母チョムスンに会うことなく、サハリンを後にするが、いつかまた訪れたいと思うのだった。

◆八十五年秋。ホルムスクの港に船が近づく。

船の甲板に女チヨムスニの娘、ミジャ。

ミジャ 船が島に近づく。サハリンが見えてきた。あの港はホルムスク、日本時代は真岡と呼ばれていた町だ。私はポケットの小瓶にいた祖父の骨を握りしめる。三十年前も私は祖父の手を握りしめていた。その時船は真岡から日本に向かっていった。周りを日本人に囲まれ、私たちは怯えていた。朝鮮人であることがバレると海に放り出されるという噂を聞いていたから。「そんなバカなことあるか」それがその頃の祖父の口癖だった。

◆八十五年夏。福島県いわき市の住宅街。近くで工事をしているようだ。

椅子に座った老女もとこ。

もとこ その人の名前を聞いて、私は思い出したの。「クルスク〈kurusk〉(コップ)」「トゥル〈tur〉(机)」「ニ〈ni〉(わたし)」。ギリヤークの言葉を使っていたのは、あれはいくつぐらいまでだったろう。母が死んだ頃には、もうすっかり使わなくなっていた。なのにその人の名前を聞いて、頭の中にあつた箱の蓋があくように思い出したの。「トゥル」「クルスク」「ニ」。私はワクワクしちゃってね。思わず言ってみたの「チヨムスンは私の妹だ」。

◆銃声。

舞台は幕間劇①と同じサハリン国境地帯の戦場。

迂回する敵の背後を突こうと移動した源太と和泉少尉。

銃弾に貫かれ和泉少尉は即死する。

源太は茂みに隠れる。

そこに狙撃手が現れる。けれど彼は日本軍と同じ姿をしていた。

源太は思わず茂みから身を乗り出す。

狙撃手は源太に銃を向ける。けれど源太の顔を見て、戸惑う。

「お前は、何人だ？」

「お前はギリヤークか？」

「バルドッホ ヴィアー (paldho vĩa) (森へ帰れ！)」

源太

兵隊は霧の中に消えた。俺は森に向かって歩きはじめた。俺たちギリヤーク人は、ずっと昔からこの島で暮らしてきた。島の生活や地形を知る俺たちに、日本は兵士としての特別な訓練をしていた。それはソ連も同じことだ。和泉少尉を撃ち、俺を逃がしたあのギリヤークの男は、日本軍に紛れ込んだソ連の工作員に違いない。日本人になりたくて、日本のために戦った俺は、ギリヤークの血によって助けられた。

俺は海峡を渡り、大陸にやってきた。黙ってものを運ぶ仕事。黙って木を切り倒す仕事。

黙って動物の世話をする仕事。少しずつロシア語も覚えたが、酒を飲んで口ずさむのは日本の歌だった。

しばらくして俺はソ連の役所に捕まった。役人は言った「お前は何者だ」

俺は答えた。「わかりません」

◆八十五年秋。ホルムスクに近づく船の甲板。

ミジヤ

「そんなバカなことあるか」。周りの日本人はどんどん帰ってゆく、なのに朝鮮人は帰ることはできない。もう日本人ではないからだ。「そんなバカなことあるか」。憤る祖父の心のなかで故郷がどんどん大きくなる。そして祖父は決意する、日本人になりすまして船に乗ろうと。祖父は書類を偽造した。後で聞いた話では民政局につとめる知り合いに賄賂をおくったそうだ。私が憶えているのは、アルコールの匂いがこもる建物のなかで、腕をまくり注射を打たれていたこと。その後、祖父はカバンのなかみを床に並べ、腕組みした役人がそれを見ていた。そして埠頭まで私たちは日本人に混じって歩いた。

◆八十五年夏。工事現場の音。椅子に座ったもとこ。

もとこ ああの頃、あの町には色んな人が住んでいた。日本人、ロシア人、朝鮮人、ニヴフ、ウィルタ、樺太アイヌ。川には魚があふれていた。港は海鳥の群れでうるさいくらいだった。山には沢山木の実がなって、木の実の汁の紫が私たちの爪を薄く染めていたっけ、……樺太が私の故郷。

ミジャともとこと向かい合う。

もとこ あなたのこと知ってるわ。私、アナタのお母さん、荒木節子さん。よく三人で遊んだわ。アナタのお母さんはまるで私の妹だった。子供の頃はやんちゃでね。なんでも口に入れちゃうの。樺太には毒草だってあるから、私はいつもハラハラしてた。娘になってからは大人しくて無口でね。困った人がいると黙って助けてあげるようなそんな人だった。

ミジャ 母のことはおぼえていません。

もとこ 私、アナタにも会ったことあるのよ。

ミジャ ええ。祖父から聞きました。

もとこ あれは戦争が終わった年の冬だった。アナタとお会いしたわ。アナタは赤ちゃんだったけど。

ミジャ ……。

もとこ おじいさんはお元気？

ミジャ 三年前に。

もとこ ……そう。

ミジャ 結局、祖父は故郷には帰れませんでした。

◆八十五年秋。ホルムスクに向かう船の甲板で、ミジャの追想は続く。

ミジヤ 三十年前。日本人に混じって埠頭まで歩く。雨が降っていた。薄暗い空の下、重いリュックを担いだ集団が行列をなして進んでゆく。目の前には大きな赤十字の船。「ハラボジ、これに乗るの?」。しかし、祖父の姿はなかった。泣きだそうとする私のそばに白い手。見知らぬ女の人が立っていた。その人は私のおでこを撫でほったをつまんだ。私は怖くなくてその人の手を振りほどいた。「ハラボジ!」その人は私を見おろして、黙って後ろを向いた。そしてそのまま雨と人ごみのなか歩いて行った。「さあ、帰るぞ」振り返ると祖父がいた。船を睨んでいた。

◆八十五年夏。工事現場の音に遮られながらも、ミジヤがもともと向かい合う。

ミジヤ 私が五歳の時、私たちは引揚げの船に乗りました。ところが日本についたあと、朝鮮で戦争が始まったんです。祖父は大阪の親戚のところまで働くことになり、私もそこで育ちました。

もところ そう。

ミジヤ 今日来たのは、ご相談したいことがあって。

もところ 何?

ミジヤは小さな瓶を取り出す。

ミジヤ あの、これ、

もところ 骨?

ミジヤ はい。

もところ 見せて。

ミジヤは小瓶をもとこに渡す。

ミジヤ 祖父の骨です。

◆八十五年秋。サハリン州チェーホフの民家。

夜。節子が座っている。

節子の向かいにはチョムスンが座っているが、暗がりで見えない。

節子 あの日。町はいくつも噂が流れていた。その中に、ソ連兵が野田の海岸に上陸したって噂があつてね。母は私に祖父塩川の様子を見に行かせたの。ところがそれがただの噂だつてわかつて、私は祖父を連れて家に戻ろうとした。その時、町の義勇戦闘隊に参加していた父を見つけたの。「お父さん！」って私は手を振った。父も私たちと同じように噂に振り回されて、家に帰る途中だった。そして私たちは家に帰った。母と妹は、毒物を飲んで死んでいたの。

◆八十五年夏。ミジヤともどこが向かい合う。

もところは小瓶を手取る。

ミジヤ 塩川さん、荒木先生、エゴール商店さん。祖父はよく樺太の話をしていました。だから骨を全部を故郷韓国に埋めてしまうのも、間違っている気がしたんです。ちゃんと聞いておかなかつた私が悪いんですが。それで少しだけ持って帰ってきたんです。樺太に墓はないのですが、墓参りの団体に問い合わせたところ、今年の秋に樺太に行けることになって、

もところ そう。

ミジヤ 荒木節子さんがまだチェーホフ、(言い直し)野田町にお住まいみたいで、そこに行つてみるつもりです。

もところ そこにチョムスンも来るの？

ミジヤ わかりません。

◆八十五年秋。ホルムスク（真岡）の埠頭に降りたミジャ。

ミジャ 三十年ぶりの樺太、真岡。結婚したばかりの父と母が暮らした町、そして父が死んだ町。

周りの人がさわぐ、誰かが山を指さしては早口になにか喋る。皆してしきりにうなづく。

一人のおじさんが堤防を指さして魚をつる動きをしながら何か言う、周囲からそうだそう

だと声がる。私は日本に残した家族のことを思い出していた。サンハリン行きの方々な

書類を見ながら娘は言った。

舞台上にミジャの娘登場。語りの中の舞台はミジャの家族が暮らす大阪。

ミジャの娘 「チエーホフって町の名前？」

ミジャ 「うん。そやねんで」

ミジャの娘 「チエーホフって人の名前やで」

ミジャ 「何した人？」

ミジャの娘 「作家。たぶん」

ミジャ 「へー」。それからしばらくして、台所で夫が本を読んでいた。

夫登場。本を読んでいる。

ミジャ 「何読んでるの？」

ミジャの夫 「チエーホフ、桜の園・三人姉妹」

ミジャ 「え？」

ミジャの夫 「ここにあった。図書館の本やな」

ミジャ 見れば本には娘が通う学校のシールが貼られている。「どう？ 面白い？」

ミジャの夫 「まだわからん」

ミジャ 夫はその本を読み続けた。そして夕方になって、

ミジヤの夫 「あのな、あの本やけどな、」

ミジヤ 「どやった？」

ミジヤの夫 「よーわからんけど、たぶん、この話には、」

字幕「教訓がない」

ミジヤ 次の日、同じ場所で同じ姿勢で今度は息子はその本を読んでいた。

ミジヤの息子登場。

ミジヤ 息子は今まで親に見せたこともない集中力で本を読み通した。「どやった？」。

ミジヤの息子 「わからんけど、」

ミジヤ と前置きをしたのち、息子は言った。

字幕「で？主役、誰？って感じ」

舞台上にミジヤの家族が並ぶ。

ミジヤ 私たちにとって、祖父は家族だった。祖父が死んだとき、息子も娘もおじいちゃんと言  
って泣いた。だから韓国へは家族みんなで行った。でも樺太で死んだ父は、私だけの父で、  
家族とは思えなかった。まして母のことは。出発の前夜、私は夫に言った。

舞台上に夫だけ残る。

ミジヤ 「もしかしたら父は、日本人に殺されたかもしれへんねんで」夫は言った。

ミジヤの夫 「ふーん」



◆八十五年秋。サハリン州チエーホフの民家。

節子 戦争が終わってからは、ソ連軍が臨時で建てた役所に、医者として勤めることになってね。同じころにあの仕事にも関わり始めた。そう、日本人をひそかに日本に送り返す仕事。昼間は医者、夜は組織の仕事、毎日働きづめだった。そのうち父がこんなことを言い出したの。「母と妹は一足先に日本に帰った」と。

チヨムスン お祖父さんお葬式、

節子 そうね。あの時も父はそう言った。あの翌日。父の仕事、日本に送り返す仕事がバレて逮捕され、法廷に送られた。そしてシベリアの収容所に送られ、そこで死んだわ。

◆八十五年秋。夕闇のホルムスクに建つホテル一室。

ミジヤ 坂の上にたつホテルから真岡の町を見おろす。電線に並ぶ鳥の影。渡り鳥だろうか。もしそうならばちぼち南へ旅立たなくちゃいけない。樺太の一日目が終わろうとしている。明日の朝、バスに乗って私はチエーホフへ向かう。同室のおばさんがラジオをとりだした。「ここ日本の放送入るのよ」と言って、ダイヤルを回した。

ラジオから流れる日本の歌謡曲が流れる。

◆流浪する源太。

源太 「お前は日本人だ」俺を調べた役人はそう言った。「そうですか」俺は答えた。俺はシベリアの収容所に送られた。沢山の日本人が働いていた。日本人たちは俺の顔を見て、シタニタ笑う。俺は黙って仕事に耐え続けた。ある日、俺たちは日本に帰れることになった。俺は役人に言った。「俺はどうすればいいですか？」役人は言った。「自分で考えろ」。その時、

俺はようやく思ったんだ。妹に会いたいって。

◆八十五年夏。もともとミジャ。

もともと チョムスンの再婚先は大家族だね。その長男と結婚したの。お互い再婚だね。向こうには2人連れ子がいた。おじいさんは最初から反対だったんですって。「お前は召使になりたいのか」って、そしたらチョムスンが「今の私はアボジの召使だわ」って言い返して大喧嘩になったみたい。

ミジャ 祖父は何も言ってくれませんでした。

◆八十五年秋。チエーホフの民家。

チョムスン セっちゃんだって、思ってるでしょ。

節子 え？

チョムスン 私にはミジャに会う資格はないって、

◆ 源太 俺は船に乗った。日本の舞鶴という港についた。

◆ 節子 あの子がアナタに会いたがっているのよ。

チョムスン あの子を寝かして化粧をして、とんでもない母親だった。

節子 逃げちゃダメ。

チョムスン 無理よ。

節子 会わなきゃいけないの、

◆ チョムスン 死んだことにして、もうそれでいいわ、

◆ もとこ 会ってあげて。お願い。

◆ 源太 棧橋に並んだ人たちが「お帰りなさい」「ご苦労様です」と言ってくれた。お握りと温かいみそ汁をもらった。

◆ ミジヤ あの人のことは考えたくないんです。だって、

◆ チヨムスン 雨が降ってた。あの日。あの子は私の手を振りほどいたのよ。

節子 いつ？

チヨムスン アボジが連絡をくれたの。船に乗る日を教えてくれた。雨が降って、沢山の人がぞろぞろ船に向かって歩いてた。アボジが私を見つけた「ミジヤに会ってやれ」って。私はあの子のそばまで行った。3年ぶりだった。

◆ ミジヤ だって、捨てられたなんて、思いたくないじゃないですか。

◆ チヨムスン 抱きしめたかった。手は勝手に、自然にのびた。あの子は不思議そうな顔をしていた。私はほほを撫でた。あの子の顔がだんだんひきつった。「ハラボジ！」私は黙って、そこから立ち去った。

◆ 源太 「アナタの軍歴が残っています」と言われた。旧陸軍第八十八師団歩兵第百二十五連隊所属第四中隊上村源太二等兵。でもそれは俺じゃない。俺はもうそれをやめたんだ。

◆ もとこ チヨムスンに会ってあげて。お願い。

◆ チヨムスン あの子には会わない。

節子 それでいいの？

チヨムスン 運命なもの。

◆  
ミジヤ でも、

もそこ お願い。あの人を救ってあげて。

◆  
源太 俺は妹を探した。山があれば登り、川があれば歯を磨き、犬と会えば見つめあい、畑を見つけたは忍び込んだ。ある日、ある街で、俺は川に飛び込んだ。

◆  
節子 もう二度と会えないかもしれないのよ。

チヨムスン 運命。

◆  
源太 川の水は濁っていたが俺は見逃さない。川床を動き回るあれはスツポン、俺をスツポンに抱きつく、そして川から上がった時、そこには沢山の人が待ち構えていた。俺の胸にだくスツポンを見て、人々は大きな拍手。

◆  
ミジヤ わかりました。

もそこ ありがとう。

◆  
源太 その日から俺は「カツパの源さん」と呼ばれるようになった。

◆  
節子 明日、午前中だから、待ってるから！

チヨムスン （遠くから声のみ） いかないわよ！

◆  
源太 俺は川と対話する「カツパの源さん」。そう呼ばれた俺は川のそばに立って、そこにいる精霊たちに挨拶をする。それだけで日本人たちは俺をありがたがる。そして俺は飛び込む。生活排水工業廃水で泡立ちテラテラひかる死にかけの川、水の中はほぼ何も見えない。俺は呼びかける。おーい、俺だ。俺だよー。なるべく楽しそうに。おーい、俺だ。俺だよー。

すると泥の中から亀だったりフナだったりひょっこり顔を出す。俺は優しく彼らを抱き、陸にあがる。すると待っていた日本人たちから歓声があがる。そして高学歴の弟子が言う。「この川は生きてる。この川はまだ生きてる！」そして日本人たち、もはや精霊の声も聴けなくなった人々は、手袋をしてゴミ袋を持ってかなばさみを持ってぞくぞくと川の掃除をはじめ。その手袋は「カップの手袋」で一セット1200円、「カップのゴミ袋」一枚250円、「カップのかなばさみ」は一つ3200円でおわけいたします。父はロシア人、母はギリヤーク、元帝国陸軍にして今は「カップ」。そんな俺をマスコミがほっておくわけない、俺はたちまち有名人になった。そんな時、妹から連絡が来た。



サハリン州チエーフにある住居。

日本時代は農園であったが今はダーチャ（菜園付き別荘）として使われている。

上手は台所から寝室につながる。下手は玄関。

台所から節子の息子が登場。遅れて節子も登場。

節子 いいわよ今日は、

息子 でも今日じゃないと、

節子 大丈夫。夕方に私一人でするから、

息子 夕方はいつも頭が痛いつて言ってるじゃん、

節子 大丈夫、今日は天気もいいし。

息子 でも、

節子 ありがとう。もう時間でしょ、

息子 まだ大丈夫。今日もこっち泊まるの？

節子 うん。

息子 ……。

節子 どう仕事は？

息子 早く専門につきたい。だって妊婦さんとか来られても無理だよ、

節子 大丈夫。おじいちゃんなんかどんな患者さんでも引き受けてたんだから、

息子 もう行くよ。

節子 時間あるんじゃないの？

息子 お母さんと喋っていると頭が痛くなってきた。

節子 どうして？

息子 やっぱり人參、今日とつちやうよ。

節子 いいのよ、もう来る時間だし、

息子 そう。じゃ、

節子 行ってらっしゃい。

息子は玄関に去る。

節子はぼんやり。時計を見たりする。

息子再登場し、

息子 お母さん。

息子の後ろに役人②がいる。

役人② どうも奥さん。

役人の後ろからミジヤが顔をだす。

ミジヤ お邪魔します。

役人② こちら西川美子さん。(ミジヤの結婚後の名前)

節子 ミジヤ？

ミジヤ はい。イ・ミジヤです。

節子とミジヤは見つめあう。

役人② あれ？お母様は？

節子 あの、それなんですが……、

役人② 君、誰？

節子 息子です。私の、

役人② 坊ちゃん、どうもアナタのお父さんにはいつもお世話になってます。

息子 あの、そろそろ、

役人② ちょっと待って、一緒に一緒に、

息子 え？

役人② (カメラを構え) はい、二人、握手、再会再会、

節子とミジヤはぎこちなく握手。

役人② 坊ちゃん、一緒、一緒。

息子 え？

役人② 気つかえ、気つかえ、

しかたなく息子も入る。

役人② 歴史の荒波、涙、涙。ハイ、レーニン！

役人②はシャッターを押す。

役人② 素晴らしい。これは人道的配慮によりなされた特別なことです。ソビエトと日本の双方が、かつてあったことを素直に認め、よりよい未来を築くためになされた特別な配慮です。この小さな交流がソビエトと日本にとって、とても大切なものであることは言うまでもないでしょう。

息子 じゃ、ま、僕、これで、

役人② 良かった。素晴らしい。

役人②と息子は下手より去る。

ミジヤ すみません。予定より早かったですね。

節子 いえ、大丈夫よ、

ミジヤ 息子さん、学校ですか？

節子 いえ、仕事です。病院に勤めてるもので。あ、お茶でいいかしら、

ミジヤ あ、すみません。

節子は台所に去る。

ミジヤは庭を見る。

節子戻ってくる。

ミジヤ 素敵なお宅ですね。

節子 あ、ここに住んでるわけじゃないのよ、

ミジヤ え？

節子 いや、まあ最近はここに泊まってるんだけど、家は他にあるの、ここは、なんだろう。何て言えばいいんだろう。

ミジヤ 別荘？

節子 うー、家庭菜園の、家。



ミジャ ヘー。

節子 ……戦争が終わった年だった。

ミジャ ……。

節子 アナタまだ赤ちゃんで、

ミジャ はい。

節子 ここでお母さんからおっぱいもらってたわ、

ミジャは部屋をみまわす。

そこに役人②登場。

役人② どうですか。懐かしいですか。

ミジャ あ、はい。

役人② 素晴らしい。(お茶を見て) あ、どうもすみません。

役人②は座る。

役人② おや、コップが一つ、

節子は台所へ、コップを取りに去る。

役人② 奥さんありがとうございます。どうですか話は弾みましたか？

ミジャ あ、はい。

役人② 国と国のお付き合い、それを支えるのが人と人のお付き合いです。

ミジャ そうですね。

節子が戻ってくる。

役人② 節子さんの旦那さんは新聞社の編集長してます。だからアナタの願いをかなえることができたのです。

ミジャ ありがとうございます。

節子 あの、それなんですが、

役人② 見つかったんでしょ？

節子 まあ、

役人② 死んでた？

節子 ……。

役人 奥さん、落ち着いて。大丈夫。さ、お茶を飲んで。

節子 (お茶を飲む)

役人② 死んでた？

節子 死んでません。

役人② あ、そう。(間) じゃなんでこないの？ 親子の対面でしょ？

節子 ミジャさん。

ミジャ 大丈夫ですよ。

節子 ごめんね。

ミジャ 大丈夫です。

役人② 何が大丈夫なの？

ミジャ ……。

役人② どうしよ。それじゃ真岡戻りますか？ここいてもしょうがないですね。

ミジャ いえ、もうちょっと、

役人② でも、

ミジャ ここって、チエーホフって名前なんですネ。

役人② はい。1890年、サハリンにチエーホフが来ました。それを記念してつけられました。

ミジャ わたしここに来る前に読みました。チエーホフ。

役人② どうでした？

ミジヤ 難しくて。

役人② 何を読みました？

ミジヤ 「三人姉妹」と「桜の園」です。

役人② そうですか、

節子が泣き始める。

役人② 奥さん？ どうしました？

節子の嗚咽はとまらない。

役人② 困りましたね。

ミジヤ 大丈夫なんですよ。わたし本当に。別に変な意味じゃなくて。私自身、どんな顔すればいいのか、本当にわからなくて。だから大丈夫ですから、

節子 ごめんなさいね、(再び泣く)

ミジヤ ありがとうございます。

役人② 奥さん、お茶のみなさい。

節子はお茶を飲む。役人は節子の肩をもむ。お茶がこぼれる。

ミジヤ あの、二人きりしてもらえませんか。

役人② …許可したわけではありませんよ。

役人は部屋を出てゆく。

節子　なんでだろうね。

ミジヤ　え？

節子　アナタが来る前はいっぱい話すことがある気がして、話す内容を考えるだけで胸が熱くなっていた。

ミジヤ　私もです。昨日は眠れませんでした。

節子　でも今は何を話せばいいのか、

ミジヤ　私もです。

節子とミジヤは笑いあう。

ミジヤ　もとこさんから、これ預かりました。

ミジヤはカバンから「ちりめん山椒」をだす。

ミジヤ　で、これは私からです。

ミジヤはカバンからお茶の葉をだす。

節子　ありがとうございます。

ミジヤ　それでもとこさんから伝言があつて、マーシャさんと房子さんのことで、何かわかれば教えてくださいって、

節子　ありがとうございます。

ミジヤ　まだ、わからないんですか？

節子　うん。

ミジヤ　そうですか。

節子　あなたご家族は？

ミジャ 夫と子供が二人います。息子と娘です。

節子 西川さん？

ミジャ はい。日本人です。私も日本人になりました。

節子 そう。私はソ連人になっちゃいました。

二人は笑いあう。

節子 あ、そうだもー姉ちゃんのお兄さん。

ミジャ カツバの源さん！

節子 聞いたで、今有名なんやて？

ミジャ はい。汚い川みつけては潜るんです。

節子 なんで？

ミジャ さあ。

節子 もし会うことがあれば伝えてほしいねん、サハリンの川も潜ってくださいって。

ミジャ わかりました。

節子 あの二人のお父さん、私大好きでね。よく遊んでもらった。ロシア人でね。すごく優しくかった。あ、そうそう。ほんで、その人が、もー姉ちゃんの結婚式の時に、チエーホフの本を朗読しはってん。

ミジャ 「はってん」？

節子 ウチえらい感動してしもて、

ミジャ 「してしもて」

節子 うわーなんや知らん急にあの頃のこと、思い出してきたわ。

ミジャ その本って、

ミジャはカバンから「三人姉妹・桜の園」の本を出す。

ミジヤ これですか？

節子 (本を手にページをめくる)

節子はページをめくり続ける。

役人 さあそろそろ時間ですよ。

ミジヤ はい。

役人 (節子に) どうかしました？

ミジヤ いま、ちよつと、

節子 (ページを指さし) あ！これ、ここ！



ここは福島県いわき市にある住宅。

もとこが座っている。

そこに源太がやってくる。

源太 よう生きとったね。

もとこ (笑う) お兄ちゃんもね。

源太はもとこに拍手。

もとこも源太に拍手。

源太 これ(と紙袋)

もとこ 何？ お土産？

源太 手ぶらじゃなんやし、

もとこ これ何？

源太 ハンバーガー。

もところ は？

源太 ハン、バーガー、

◆八十五年秋の夕暮れ。チエーホフのダーチャ。

節子が座っている。頭を押さえている。

玄関から息子。

カゴいっぱいの人参を持っている。

息子 大丈夫？

節子 ……うん。

息子 痛い？

節子 痛い。

息子は節子の肩をもむ。

節子 ありがとう。

息子 うん。

節子 あれで良かったのかな、

息子 昼間の？

節子 ……。

◆八十五年秋。サハリンから宗谷岬へ向かうフェリー。

甲板にミジャがいる。

風に抗って、本を開く。

この時、舞台にはもところ、泥酔するチョムスン、頭痛に苦しむ節子がいる。

ミジャ 「まあ仮に、この町の十万の人口―それはもちろん、時代遅れな粗野な連中ばかりですが―そのなかに、あなたがたのような人は、たった三人だとします。言うまでもなく、あなたがたには、周囲の無知もうまいな大衆のうち勝つなどということは、とてもできません。一生のうちには、あなたがたも段々譲歩しなければならなくなって、やがては十万の群衆のなかへまぎれこみ、あなたがたの声も現実の雑音で掻き消されてしまう。だからと言って、あなたがたは空しく消え去るのではない。なんの影響も残さずに終わるわけではない。あなたがたのあとに、あなたがたのような人が、今度は六人でてくるかもしれません。それから十二人、それからまた……というふうが増えていって、ついにはあなたがたのような人が、大多数を占めることになるでしょう。二百年後、三百年後の地上の生活は、想像も及ばぬほどすばらしい、驚くべきものになるでしょう。」

(引用元「桜の園・三人姉妹」)

訳…神西清 新潮文庫

◆八十五年秋。大阪

ミジャ ただいま。

ミジャの娘 どうだった？

ミジャ うん。いいとこだったよ。

ミジャの夫 お父さんのことわかったか？

ミジャの息子 何？ お父さんのことって、

ミジャ いや、調べてないし、っていうか調べようないし、

ミジャの娘 おじいちゃんの骨、渡せた？

ミジャ ……。持って帰ってきた。

ミジャの息子 ……マジ？

ミジャの夫 何のために行ったの？



ミジャ 説明する責任ある？

ミジャの夫 (呆れて) お前は、

ミジャの娘 今度、私も行きたい。

ミジャの息子 俺も行く。

ミジャ うん。じゃ、一緒に行こ。

四幕終り

字幕 「1989年 サハリンへの外国人立ち入りが緩和される」

字幕 「同年 樺太同胞一時帰国促進の会(現在の日本サハリン協会)設立。日本への一時帰国が始まる」

字幕 「1991年 ソ連崩壊」

字幕 「1992年 サハリンから日本への永住帰国はじまる」

字幕 「いまでもサハリンには様々な人が暮らしている」

幕

韓国語監修 徐義才

ニヅフ語指導 白石英才 (札幌学院大学)

岩手弁指導 劇団らあす (花巻市)

参考資料

- ・「桜の園・三人姉妹」  
チエーホフ著 神西清訳 新潮文庫
- ・「サハリン島」  
チエーホフ著 原卓也訳 中央公論社
- ・「チエーホフ一幕物全集」  
チエーホフ著 米山正夫訳 岩波文庫
- ・「無声慟哭・オホーツク挽歌」  
宮沢賢治著 新潮文庫
- ・「サハリンへの旅」  
李恢成著 講談社文庫
- ・「知られざる本土決戦 南樺太戦史 日本領南樺太十七日間の戦争」  
藤村建雄著 潮書房光人社
- ・「サハリンを忘れない 日本人残留者たちの見果てぬ故郷、永い記憶」  
後藤悠樹著 DU BOOKS
- ・「ケヴォングの嫁取り」  
ウラジーミル・サンギ著 田原佑子訳  
群像社ライブラリー
- ・「さんねん峠」  
作・李綿玉 画・朴民宜 岩崎書店
- ・引用112ページ 「桜の園・三人姉妹」チエーホフ著 神西清訳 新潮文庫
- ・引用51～52ページ 「無声慟哭・オホーツク挽歌」宮沢賢治著 新潮文庫
- ・引用43ページ 「無声慟哭・オホーツク挽歌」宮沢賢治著 新潮文庫